
刹那の瞬間

ドリル男爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の瞬間

【Nコード】

N2626N

【作者名】

ドリル男爵

【あらすじ】

防衛省のデータベース、嚴重な警備と監視が施されたサーバールームから一つの重要な情報が盗み出された、それが事件と戦闘の発端だった。

防衛省から忽然と姿を消した日本政府を沈没させかねないデータ、それを奪取した某国工作員達を政府の方針で設立された“特殊な部隊”に所属する人間達が血眼になって追跡を行う。

作戦遂行中に目に飛び込んでくる周囲の人間の凄惨な死。

目的の為なら死をも前提とする某国工作員達。

防衛省から奪取された情報が語る『新しい抑止力』の真実。

そして、決して交わる事の無かった人間との人生の邂逅。

特殊部隊において最高の能力を誇る少年は、それらを見て、肌で感じて物語の帰結へと足を進める。

人は短い間しか生きられない

そんな中で一人の人間として輝いていられる時間は更に短い“刹那の瞬間”だけ

貴方はそんな“刹那の瞬間”の中でどんな生き方をしたいですか？

多数の人間、多数の思惑はあるべき終点地点へと進んでゆく。

それが、誰もが望まない結末だとしても……

注意

・この物語はフィクションです、実際に存在する人物、国家、事例とは全く関連性はありません。

序

深い、深いまどろみの中で、最初に像を結ぶのは、どす黒く紅い光、それが吹き出した鮮血だとわかる頃には、血液の鮮烈な匂いが嗅覚を貫いていた。

カーテンが半分ほど閉められ、薄暗い夕暮れ時の部屋に倒れている二人の男女、包丁を持った俺は、強烈な赤色をぶちまけたその二つの死体を静かに見下ろす。

鼻腔を刺激する血液の匂い、背中に形成された包丁の刺し傷、それらが精神を狂気に駆り立てる中、俺は何も口に出そうとせず、硬質で怜悯な目を二つの人間だった肉塊に向けていた。

薄暗く、色彩の少ない部屋に映える黒っぽい赤の水溜り、それを見ながら俺はただ自分に言い聞かせる。

今までの状況を打開するには、こうするしか無かったんだと。

「ひっ……」

そんな中で不意に聞こえた短い悲鳴、それに反応して後方に振り返ると、リビングから短い廊下で結ばれた玄関の扉から、三十代そこそこの女性が恐怖に表情を染めながら震えていた。

「ああ、この“ごみ共”の死体を見て驚いてるんだな」

無機質な目を女性から肉塊に向け直し、数メートル先の女性に聞こえない程の小さな声でそう呟くと、包丁を握り直し、重い足取りで玄関に向かう。

タン……タンと間の空いた規則的な足音、それに目の前で立ち尽くす近所の主婦らしき人の顔がどんどん青ざめてゆく。

「一体どうしたの？、取り敢えずその包丁を置きなさい……ねっ？」

恐怖で震える唇から漏れた細い声、制止を求めるその声を無視し、俺は玄関の扉との距離を詰める。

玄関との距離と自身の距離が一メートルを切った所で、戦慄が最大まで達した主婦は声帯を震わせ、悲鳴を口に出そうとしている。

声帯が振動し、恐怖の悲鳴が空气中に放出されるその瞬間、俺は遅くて単調な足取りを歩んで来た脚部に力を込め、右足を大きく踏み込んで主婦との距離を零まで詰めた。

同時に鋭い突きを繰り出した血濡れの包丁が肋骨の間から侵入し、主婦の右胸を貫き、大量の血飛沫を噴出させる。

焼けた火箸を押しつけられた様に身体を反らせ、顔を恐怖に硬直させる主婦を血飛沫の中から見据えた俺は、包丁を持った右腕を時計回りに軽く捻った。

ためらいも無く突き刺したせいか、肺まで到達していた包丁は回転させた事によつてその切っ先で肺に穴を空け、主婦が悲鳴を上げるよりも速く、その生命を迅速に奪った。

刃物に肺を刺激され、声帯を震わせ悲鳴を出す事無くショック死した主婦は、包丁をその右胸に突き刺したまま肉を打つ音と共に廊下へと倒れ込む。

「黙っていれば生きれたものの……」

そして、自分でも驚くほど伶俐にして冷淡な声が、倒れ込んだ一つの命を終焉へと導いた。

人間の死を見れば、それが他人だったとしても精神に多大な影響を与えるもの。

だが、先程の二人も合わせ、三人の人間を殺したにしては、俺の精神は意外と冷静だった。

それは恐らく、自分が生き延びるにはこの方法しか無かった、そう自身に言い聞かせ精神を欺瞞しているからだろう。

所詮、人というものは一番自分の保身に力を入れる生き物だ。

地位、名声、金銭、そして自分の身の為なら他人の命を奪うことだつて躊躇わない。

それは、どんなに心優しい人間、どんなにプライドの高い人間にも

言える事。

勿論、三体の死体を尻目に立ち尽くす俺も例外ではなく、自分の身を案ずるが故に彼らを殺す事を選んだ。

だが、自分の行った行動が例え人殺しだったとしても、その行動が正しかった、そうするしか活路を見出す事が出来なかった、そうやって自分の考えを正当化してしまえば、冷静に状況を判断し、自分の考えを実行する為にどんな行動も躊躇することもなく行う事ができる。

その結果、玄関で倒れている主婦は助けを求めようとして血の沼に倒れ、リビングに倒れてる二人は俺を忌み嫌い、“一番憎い俺の手”によって殺されたのだから。

玄関で虚ろな目をしながら倒れている主婦だった肉塊、それから目を離し、どす黒い返り血を受けてなお明確に見える無数の火傷の痕と切創の残った左腕を一瞥した俺は、再びあの二人が死んでいるリビングへと足を向ける。

序

お前さえ居なければ……お前さえいなければっ！！

淡々とした調子の足音、左腕に残る消える事を知らない火傷の痕と切創、それらが脳裏に浮かび上がらせたのは、尋常ではない苦痛と憎悪を味わった地獄の様な日々。

苦痛から逃れる事の出来なかった自分の弱さ。

そして、淡々とした足音が伝えた戦慄と、狂気に顔が歪む人間の形をしながら人間でない二体の残酷な怪物。

だが、それはもう過去の話。

自分の親としてでは無く、ただ恐怖の象徴として存在し続けて来た二人は、互いに背中の中の左側に出来た刺し傷から鮮血を流し、死んでいる。

彼らとしては望んでない死だったかもしれないが仕方がない、彼らは恐怖と戦慄を人に与える事は出来たが、迫りくるそれから逃れる術を知らなかったのだから。

それよりも問題なのは、自分の保身を一番に考え、自由を手に入れる為にあまりにも高い犠牲を払ってしまった事だ。

三人の人間の死という、一生をかけても払いきれない程の代償を。

「一生掛っても払いきれない代償を負ったのなら、それを踏み倒せば良いだけだ。」

こいつらの屍を背負い、生きて行きながら……」

淡々とした足取りを止め、フローリングに転がる二つの死体に投げかけるかのようにそう呟いた俺は、壁に金具で掛けられた黒色のコートを手に取った。

年季の入ったそのコートは、二体の死体から近い場所に置かれているながら、彼らの汚れた血を避けたかの様に、純粹で綺麗な黒色をしている。

「俺は絶対に負債を踏み倒してみせる、手に入れた自由の為に」

そんな、煙草の匂いが染みついたコートを羽織った俺は、再び淡々とした足取りで、ドアの隙間から夕日の光が差し込む玄関、二度と見る事が出来ないと決め込んでいた懐かしい外の世界に向かい足を進めた。

*

改札口に切符を通し、一日に数えきれない程多い人が駆け上がったであろう階段を登りきった先にあったのは、高層ビルと喧騒、車と人混みで溢れ返った新宿の街だった。

そんな、酔いそうになる程人で溢れ返った駅前を、俺は少し大きめ

のコートを羽織りながら見渡していた。

そういえば、両親がまだ正常だった時、一度だけこの街に買い物に
来た事があったな。

確か、余りの人の多さに驚きながらも、初めて見た高層ビル群には
しゃいだ様子で両親の後を追っていた。

昔の事を思い出しながら、暇そうにタクシーの中で雑誌を読み、乗
車する客を待つドライバーや、髪を茶色に染め今風のファッション
に身を包み、メールを打つ手と友人との会話に応じる器用な若者、
そして、夕飯なに作ってほしい？と問いかけながら、互いに笑顔を
絶やそうとしない親子連れを一瞥しつつ、俺は駅のすぐ近くにある
スクランブル交差点の信号待ちをする人の波の中に加わる。

人は時として急に変わってしまうものだ。

過去、普通の子ども好きな親の様に笑い、時には叱り、一緒に感情
を共有してくれた両親ですら、一つの出来事で大きく変わってしま
った。

ただのこども好きで中の良い二人から、互いを嫌い、二人で生み出
した物を徹底的に破壊しようとした狂気の化身へと。

だが、今考えると、それは仕方がなかったのかもしれない。

この世の中で、永遠に理念や考え方を変えない人間は恐らく存在し
ないだろう。

他人の言葉や自分の置かれた状況に左右され、自分、又は自分が関

わる者達の都合のよい行動だけを考える。

それが、それ程経っていない人生の中で掴んだ、たった一つの確信だ。

だから、あの二人は憎い存在である俺を虐待し、彼らの死を望んだ俺は、今日それを行動に移したのだから。

そんな事を考えているうちにスクランブル交差点の歩行者用信号が青になり、周囲の人波達がまるで本当の波の様に歩き出し、人工の波頭を覗かせた。

そこで考える事をやめた俺は、人口の大波に身を任せ、白と黒が交錯した横断歩道をゆっくりとした足取りで進む。

しかし、これからどうするか。

昔の記憶を辿って何とか新宿まで足を運ぶ事は出来たが、これからの事は完全に未定だ。

序

勿論、この辺りに頼れる知りあいも行く宛ても無い。

真顔で他人の事など気にしない人波の中、そう考えながら俺は密かに眉間に皺を寄せた。

金は家からいくらか拝借したが、恐らく節約したとしてももって数日間。

それに、アパートの死体がばれるのも時間の問題だから、明日辺りには警察が動き出すだろう。

警察が動き出したのを気付いたメディアも動き出せば、下手すればニュースや新聞に顔等の情報が出て、潜伏は更に困難になる。

まだ潜伏先はおるか、今後の予定すら決めていないのに……

殺人を実行する前に、もう少し細かな所まで決めておくべきだった。

そう自分を呪っても状況が変わる筈もなく、俺は逼迫した状況に駆り立てられるかの様に、不意にアスファルトを靴で叩く間隔を狭める。

丁度、その時だった。

「本日未明、東京都内のアパートで、男女の刺殺死体が合わせて三
体発見されました。」

まさか、もう死体が見つかったのか!?

不意に聞こえてきた二十代後半の女性の物と思われる無機質な声、それが語った自分しか知らない殺人現場の情景に、俺は耳を疑いながらも音源の方向に鋭い目を移した。

ゆっくりと揺れ動く人の波の先に存在する七階建てのアルタビル、そこに設置された存在感抜群のディスプレイに映し出されたアナウンサーのバストショット。

そして、その下にテロップとして出ている“都内アパートで三体の刺殺死体発見”という文章に、全身に寒気が走り、額に一筋の冷や汗が流れる。

いくらなんでも早すぎる、三人を刺殺して家を出て、電車で新宿まで移動するのに三十分と掛っていない。

そんな短い間に警察が死体を発見し、メディアに情報を伝達できる筈がない。

「警察の調べでは、東京都内のアパートの一室で住人とみられる男女と、近所に住んでいた主婦と思われる女性が何者かに刺殺された様です」

一体どうなっているんだ……

見覚えのある光景を脳裏に浮かび上がらせるアナウンサーの言葉を聞きながら、思わず口に出してしまいそうな言葉を必死に飲み込んだ俺は、平静を装い、何事も無かったかの様に、ディスプレイから目をそむけた。

「現在、現場に残っていた犯人が使用したと思われる凶器から指紋を採取し、警察は殺人事件として調査を進めて行く方針です」

警察の行動が始まる時間、メディアへの情報伝達速度、完全に想定外な二つの要因に、横断歩道を渡りきった俺は、密かに鋭い視線を周囲の人間に向ける。

あの部屋に住んでいたのが、殺した二人と俺だけだという事実が発覚すれば、無論、行方の分からない俺を怪しみ警察はすぐに探し始める。

その時に、殺した二人が俺に行った虐待が明るみに出たとしたらどうだろうか。

虐待に耐えきれなかった息子が、台所にあつた包丁で両親と第一発見者を刺殺。

動機としては十分すぎるその情報は、凶器に残っていた指紋と相まって、俺を容疑者だと確定させる要因の一つになる。

今はそれ程強くない周囲の人間の警戒も、数日経てば名前と顔写真が全国ネットで公開されたことによって最大になり、潜伏がより困難になるだろう。

もしかしたら、早々に俺が置かれていた状況を把握した警察が、容疑者として俺を探しだそうとしているかもしれない。

搜索を始めた、始めてないしろ、俺が容疑者だとわかるのは時間の問題、まずい状況だ。

浅はかな知識、計画性の無い殺人、そんな言葉で自分を自嘲しても、刻一刻と今後の行動の幅は狭まってゆく。

落ち着け、落ち着くんだ。

そう自分に言い聞かせ、次にとるべき最善の方法を考えながら、俺は歩道に流れる人の波から外れ、ビルとビルの間から続く路地裏に足を踏み入れる。

いま考えれば、この路地裏に何気なく足を踏み入れなかったら、今の生活は存在しなかったのかもしれない。

*

踏み込んだ路地裏、そこは周囲をビルに囲まれている事もあって、非常に薄暗く人の気配が全く感じられない場所だった。

いくら路地裏でも、表通りよりかは劣るとはいえ疎らに人がうろついているだろうと思っていた俺としては意外に感じたが、今はそんな事を考えている暇は無い。

序

警察が動き出す以上、長い間おなじ場所に潜伏する訳にはいかない。周囲に血縁関係者や親しい知り合いが居たとしても、ニュースや新聞で俺が殺人犯だとわかれば一発でアウト。

やはり、警備の厳しい東京から出来るだけ遠方に逃げ、年齢や住所を偽ってでも、なにか仕事をして生きていくしかないかな。

一先ず駅に戻って、顔がわれる前に列車で東京を離れよう。

そう考えた俺は、財布の残り金額を確かめながら、だいぶ後方に遠ざかった駅前に足を伸ばそうと体を後ろに向ける。

「お前だな、今日の殺人事件の容疑者の天城 纏ってガキは」

小さくも芯がありドスの効いた声が、不意に耳をついたのはその時だった。

まさか、こんなに早く警察が追ってきたのか？

全身に走った驚愕が思考能力を奪ってゆく感覚を覚えながらも、俺は声のした駅前の方に目を向ける。

角刈りに切り揃えられた頭の下から覗く鋭い眼光、ヤグザの様な厳しい顔、三十代後半と思われる顔からは予想出来ない程しつかりと

した体躯、それに合わせ多少の余裕を持たせて作ったであろう大きなスーツ、動揺で密かに揺れ動く瞳に映った男は、そんな容姿を見せながら俺の進路を断つ様に立ち尽くしていた。

お世辞でも警察官とは言い難い容姿だが、俺の名前を知っていると
なると警察官か刑事の類だろう。

だとしたら不味いな、相手が確信を持って話し掛けて来たという事は、この辺の警察官には既に俺の情報が出回っている筈だ。

もし、運良くコイツを撒けたとしても、他の警察官や警察関係者に見つかれば逃げ切れる確信が無い。

やはり、自由を手に入れる為には、三人の人間の命は些か重すぎた。

早くもツケが回ってきたようだな。

そう考え自分を呪い、俺は動揺を必死で押し殺しながら、目の前の大男を睨みつけた。

いつその事、ここで捕まるか？

殺人を犯して捕まったとしても、俺はまだ少年法の適用される年齢だ。

死刑、無期懲役は無く、長くても数年の懲役刑。

それに、裁判で虐待の事実が判明すれば、俺にも弁解の余地があるかもしれない。

ここでこの大男を出し抜いたとしても、後に待っているのは常に周りの目を気にしなければいけない逃亡生活。

精神的、体力的にも厳しいそんな生活に果たして耐えられるのだろうか？

男を睨む目をそのままにし、何気なくポケットに手を突っ込むと不意に冷たい感覚が指先に走った。

いや、厳しい逃亡生活に耐えきれるかどうかの問題じゃない。

俺は、あの三人を殺した罪を踏み倒すと心に決めた。

自分しか信じられないこの状況下でここでわざと捕まる事は、自分の意思を裏切る事になる。

今まで自分だけを信じて生き、自分の判断で障害を排除した俺は、一番信頼できる自分を裏切る訳にはいかない。

他に頼る者が無い以上、自分を裏切ってしまったら俺は存在意義を失ってしまうのだから。

それに、殺人という罪から逃げ、それを踏み倒すのなら死体が一つ増えた所で然して変わりは無い。

「俺が、その天城 纏だったとしたらどうするんだ？」

不自然に口元を歪め、無意味な笑みを浮かべたその口から挑発的な

言葉を目の前の大男にぶつけた俺は、ポケットに突っ込んだ左手の中に冷たく硬質な感触を軽く握る。

数年間笑った覚えが無い自分が、不自然ながらも笑みを形成した事に内心俺は驚いたが、それも一瞬の事で、一拍後には大男の呼吸を読むことに神経を集中させていた。

「もし、お前が東京都内で殺人を犯した天城 纏だとしたら、悪いが俺に同行してもらおう」

表情の変わり様から、俺が何か行動を起こす事を悟った大男、彼もまた自分の様に真剣な表情を浮かべながら、だらりと腕を下げ身構える。

序

成程、警官というだけあって、犯人確保の為の手段は心得ているという訳か。

だが、見た所相手は素手。

ポケットの奥に感じる無機質な感覚がある限り、相手が体術を使用したとしても負傷もしくは殺害出来る可能性は十二分にある。

恐らく、相手も集中している事もあって勝負は一瞬、その一瞬の隙を見極めなければ俺は手に入れた物を全て失う。

硬質で虚無を浮かべる眼光と、真剣ながらもどこか加減を見せる眼光、その両者がぶつかり合い、路地裏の一空間を時間の止まった世界に作り替える感覚を感じながら俺は呼吸を読む事に全神経を傾けた。

互いの肩がガソリン機関のピストンの様に規則的な上下運動をする中、俺の呼吸が大男の呼吸と一瞬ずれた、その瞬間だった。

「隙あり、だ」

低く、芯があり、ドスの効いた声と共に、先ほどまで全く隙を見せなかった大男が急に体勢を低くし、想像以上に持ち合わせている脚力で自分との距離を詰め始める。

先に接近を許したか……

そう思う暇もなく、俺は一拍遅れながらポケットの奥にある硬質な物体を取り出す。

そして、鞘から抜かれた重く空気の粒子を切り裂いてしまう様な鈍色の刃をもつコンバットナイフ、金と一緒に家から拝借したそれを大男に向けて逆手で構えた。

体勢を低くし、臓器を刃先から守る様に突進してくる大男に対し、肺に刃先を突き入れ捻り、一瞬で行動停止に陥らせる事は出来ないだろう。

しかし、相手が丸腰だという事を考慮すれば、必ず一撃目を放つ後に隙が生まれる。

先制された以上、その隙を狙うしかない。

大男との距離が近づくにつれ、彼の放つ異様な威圧感を全身に感じ、身が竦む様な感覚を覚えながら、俺は重心を気持ち後ろに移動させる。

それから一秒程遅れ、逆手に構えたナイフに全く臆することなく距離を詰めた大男が、その鍛えられた体躯から、まるでボクサーの様な左ストレートを俺の顔面に向かい繰り出した。

凄まじい速度で接近する大男の拳、それを俺は後ろに移した重心を利用して、バックステップで右後ろに移動して拳を避ける。

そこから、自分の左に大男の大木の様な腕を確認し、男に隙が存在

する事を確認した俺は、今だと言わんばかりに足に力を入れ、大男の懐に身を飛び込ませた。

お前には何の恨みも無いが、死んでもらおう

そう心の中で呟き、俺は躊躇いもなく順手に構えなおしたナイフを大男の右胸に向かい突き出す。

突き出したナイフがそのまま進んでいけば、確実に男の右胸に刺さり、更に軽く捻れば肺に達したナイフが、その周辺に存在する神経群に身を引き裂く鈍痛を与え、血飛沫と一瞬の痛みと共に大男に死を与えていた筈だ。

「危ねえな、ナイフなんて物騒なもん振り回すなよ」

だが、現実には俺の目に映ったのは倒れ行く人体とどす黒い鮮血では無く、ナイフを携えた自分の左腕を凄まじい腕力で掴む大男の姿だった。

まずい、止められたっ！！

そう叫んだ胸の警告灯は既に赤色に点滅し、次に起こるであろう出来事に注意を促していたが、もう既に遅かった。

ナイフを握っている左腕と反対に位置する無防備な右肩、そこに左の手の平を当てた大男は素早く身を捻った。

一瞬何が起こったのかわからなかったが、不意に感じた浮遊感と上

下逆さまになった大男の体、そして背中走った鈍痛と共にアスファルトと曇った空の両者が交互に視界に現れた事で自分の身に何が起こったのか理解出来た、と言うよりは無理矢理に理解させたと言った方が正しい。

「うぐっ……」

全身を何かで押しつぶされる様な長く重い鈍痛、それに呻き声を上げながらも、俺は手元にナイフがある事を確認すると、前方に存在するであろう大男に鋭い眼光を向ける。

そう、俺はナイフを向けた大男に体を腰投げで投げ飛ばされたのだ。

「全く、武器を所持してるなんて聞いてないぞ。運よく腰投げが決まったから良かったものの……」

視界の先に映る綺麗な腰投げを決めた大男、彼は言葉とは裏腹に余裕の表情を見せながら倒れている俺の方に脚を進めていた。

序

俺はまだやれる、こんな所で捕まる訳にはいかない

全身に痛みが走り、まともに体が動くかどうかからない圧倒的に不利な状況、そんな中でも俺の理性は手放しかけたナイフを強く握らせる。

どんなに泥臭くても、卑怯でも良い、こいつを行動不能に陥らせ逃げ延びてやるっ！！

そして、自分でも驚くほど血が上っている脳裏が確固たる信念を叫んだ瞬間、まだ痛みが残る両足が跳躍し、接近しつつある大男に大振りのナイフが襲いかかった。

「うおおああああああつ！！」

魂の底から絞り出された大通りにまで聞こえてしまうほど大きい雄叫び、それと共に順手で構えられたナイフが大男の首筋に向かって一閃される。

これが恐らく、男を行動不能にし逃げおおせる最後のチャンス。

外せば攻撃のチャンスは残されていないだろう。

この一撃を外せば二度と行動不能に陥れるチャンスが残されていない、正に背水の陣という状況に置かれている事もあり、一閃され

た鈍色の刃は大男の頸動脈に向かい、正確に接近する。

よし、これなら確実にこいつを行動不能に出来る。

ナイフが迫っているにも関わらず、冷静な様子でその軌跡を確認する大男に一抹の不信感を抱いたものの、今さらナイフを握る腕を止める必要も無い。

俺はナイフを向ける方向をそのままにして、左腕に更に力を入れて振りぬく。

確実にナイフが大男に直撃した、そう確信した瞬間だった。

冷静な表情で固められていた大男の口元が不意に歪み、一切の行動を止めていた巨体が後方に流れ、迫り来る大振りのナイフを紙一重で避ける。

そして、その流れで一閃された巨木の様な腕がナイフを持つ左腕に直撃した。

しまった、そう思う暇も無く左腕に走った衝撃と共に、強く握られたナイフが乾いた音を立てアスファルトに落下する。

「まさか……避けられるなんて……」

耳を貫く様な無機質で硬質なナイフの音、それが自分に完全なる敗北を理解させ、同時に全身に落胆の感情を走らせた。

痺れる左腕を押え、思ったより冷静な理性は次にとるべき行動を考えるが、逃亡するにしても大男に対して何か行動を起こすとしても、彼の体術の腕を考慮すれば成功率は極端に低い。

それに、警察がこの男だけしか派遣していない事は考えにくく、恐らく路地裏の周辺には数人の警察官が待機しているだろう。

呪うべきは自分の知恵の浅はかさか……。

先ほどまでとは違い、逃げ延びる事の出来る確率が微塵程しかなく、絶望しか残されていない状況で、俺は何もできない自分を静かに自嘲する。

だが、微塵でも逃げ切れる可能性が残っているのなら、その可能性に賭す他はない。

何時までたっても可能性を捨てようとしないう俺は、目の前で不敵な笑みを浮かべる大男を見据えつつ、すぐに後ろを振り返り、逃げさせる体勢をとる。

「三人の人間をいとも簡単に躊躇無く殺した事だけはある、判断力、行動力、身体能力、何より目的を達成する為なら迷いや焦りを見せない強固な精神力を持ち合わせている。確かに”当局”の言う通り良い人材だ」

当局、人材、一体何の事だ。

俺の事を知っている所から警察関係者と考えた俺の予想は外れてい

たのか？

男の隙を見つけ出し、その瞬間に全ての力を逃げる事に使おうと決め込んでいた両足だが、男の放った“当局”という不可解な言葉にその行動は止められた。

「お前俺を刑事か何かと勘違いしてたのか？」

動きを止め硬直した俺を見た大男は、笑みを形成している口元から、まるで自分の心中を察している様な言葉を漏らすと同時に、アスファルトに落ちたナイフを蹴飛ばしながら自分の方に向かって歩み寄る足を向ける。

「もし、そう思っていたのなら、お前のその予想は外れている。俺が刑事の類だとしたら、子どもとはいえ殺人犯を相手にするのならそれなりの武装も応援も用意しておく筈だ。それに、この国の警察は数十分で殺人事件を察知してメディアに伝える程の能力は持ち合わせていないからな」

自分の心中に浮かび上がった問いに歩きながら答えた彼は、スーツのポケットから煙草の箱とジッポライターを取り出すと、それに慣れた様子で火をつけて銜えてみせた。

序

「刑事じゃないだと、じゃあお前は何の為に俺を追って来たんだ？」

逃げる足を完全に止め、思わず漏らした疑問の声に、銜えた煙草を吸い白煙を吐き出した大男は「ああ、そういえば説明がまだだったな」と静かにその口を開く。

「まず初めに説明しておくがな。俺はデカでも、しがない安月給で冷や飯食いの巡査でもない。これでもれっきとした防衛省に所属する政府関係者だ」

先から白煙を噴き出す煙草の灰が落ちると同時に、大男は一息にそう並びたてた。

「政府関係者だと、お前みたいなヤクザみたいな面の奴が防衛省にはわんさか居るのか？」

一瞬の静寂の後に一息に並びたてた言葉を冗談混じりに否定した瞬間、大男は眉間に皺を寄せ「わからない奴だな」とため息交じりの言葉を発したが、俺からすれば、この男の言っている事は真実だとは考えづらい。

大男のヤクザの様な風貌からは彼が防衛省の職員とは到底思えない、

どちらかと言えば陸自か海自の隊員といった風貌と図体だ。

それ以前に、この大男が自衛隊員だとしても、防衛省の関係者だとしても、どのみち俺を執拗に追い回す理由は無い。

ナイフを携行している殺人犯とはいえ、犯罪者に対して対処するのは警察の仕事で自衛隊や防衛省は全く関係を持っていないのだから。まあ、俺がテロリストかその類だったら話も違ってくるだろうがな。

「百歩譲ってあんたが防衛省職員や自衛隊員だったとしよう、俺みたいな犯罪者をニューズまで流し追い回して一体何が目的なんだ？」

だが、大男は俺の質問に全く答えようとせず、ただ煙草を口から離し白煙を吐き出すだけ。

今の彼には先ほどの様な隙の無い動きは見られず、ナイフを拾い上げる事も逃げだす事も可能だったが、脳裏に浮かび口にだした疑問が妙に引っ掛かり、足を動かそうとはしない。

「なあ纏、お前はこの国の現状をどう思う？」

そんな中で、不意にぽつりと置く様に放たれた言葉に俺ははっと落としていた視線を大男に向ける。

「この国の現状って、日本の現状の事か？」

不意に問いかけたにしては実に大きく、考えづらい、それに馴れ馴れしい口調で放たれた大男の問いかけは、急に話の内容が変わったにも関わらず不思議と違和感を感じない物だった。

俺の返した言葉に「ああ、そうだ」と短い声を漏らした大男は、口から離れた煙草を軽く払い、乾いたアスファルトに灰を落とす。

この国の現状……、世間話にしてはかなり壮大な話題だな。

さつさと自分の素姓を明かし、さつさと自分のとるべき行動をとった方が賢明なのに、何故こいつはそんな事を聞くんだ？。

そんな大男に、いきなりそんな事を聞かれても答えられるはずがないと睨む目を向けると、彼は吸いつくした煙草をアスファルトに投げ捨てると、新しい煙草を箱から取り出しながら静かに口を開いた。

「韓国、中国の急速な軍事化、北朝鮮といった何をしでかすか想像のつかない国家の出現、急速な変化を遂げているアジア諸国の中で日本は憲法という名の鎖と無能な政治家、凄まじい額の国債により独り取り残されている。常に変化し、その構成を変えようとしているアジアでもし大規模な戦争が発生すればアジアの版図は大きく変わり、下手すれば“この国”がその戦争に巻き込まれ、第二次世界大戦で経験しなかった本土への上陸や、もしかしたら再び核兵器の炎を被ることになるかもしれない。そんな中で頼みの綱の在日アメリカ軍はそもそも冷戦時のソ連を牽制する為の一拠点として確立していただけで、冷戦が終結し核抑止力が成立した世界においては当

然ただの余剰戦力となり下がり、当然米国としては余剰戦力に予算を回す位なら早々に撤退させ余った予算を他の事につき込みたい所だろつ」

そう言ったところで大男は煙草に火を点けようとライターを煙草を銜えた口元に近づけるが、ライターオイルが丁度切れていたせいか、煙草の先からは小さな炎や白煙は一切見られない。

「くそ、オイルが切れてやがる」

火の点かないライターをスーツのポケットにしまい代わりに煙草の箱を取り出した大男は舌打ちをしながら銜えていた煙草を箱の中に戻す。

「だが、現実には現在の米国は沖縄海兵隊を撤退させる予算は大きな負担だ。予算を度外視したとしても本国へ撤退させた“余剰戦力”は解雇を余儀なくされ、解雇された海兵隊員は世論に働きかけ政府に多大な影響を与える。それを恐れて米国は海兵隊の撤退を渋っているが、その中途半端な考えでは軍事化の著しいアジア諸国を相手にするのは難しい」

「なら、自衛隊はどうなんだ？」

序

完全にだんまりを決め込んでいた俺が急に言葉を発した事に驚いたのか、大男は片眉を吊り上げながら続けようとした言葉を止める。

そんな彼に何を黙る必要があると目で伝えるが、彼の話は聞くだけにとどめようと考えた理性からすれば長口舌を遮った言葉は自身でも不思議なものに聞こえた。

「自衛隊は確かに他国の正規軍には劣るものの自国を防衛するには十分な戦力を保有していると思う、それだけで十分じゃないのか？」

煙草を吸い一服をしている隙の多いこの状況ならば、この男から逃亡を図るのが一番賢明な判断だろう。

しかし、大男の不可解な質問に理性は逃げるという選択肢をとらず、数年前ニュースや本で知った臃げな情報を記憶野から引っ張り出し、さらに言葉を続けていた。

そんな俺に対し、煙草の箱をスーツのポケットにしまい込み、先ほどまでの余裕と隙を不意に消した大男は表情をすぐさま真剣な物に変える。

「確かに自衛隊は空軍力、海軍力においてはアメリカ以外の国と対等、いやそれ以上に戦える能力を持っている。だがそれは防衛力の観点から見たときの話だ。いざ戦争となれば相手の核ミサイル基地

や重要拠点を破壊する事が必要になるが、憲法で防衛力の保持しか認められていない日本の航空機はどれも他国を攻撃しに行けるほど航続距離が長くは無いし、海上自衛隊のイージス艦については対艦攻撃性能が十分に備えられているから恐らく問題無いだろうがイージス艦の主要な目的はミサイルから艦隊を防衛する事であって、もし相手国が空母を基幹とした艦隊を保有していた場合は少なからず被害が出るだろう。あと、陸上自衛隊に関しては90式戦車などの主力となる戦闘車両を保有しているが日本の橋では戦車の重量には耐えられない所から、迅速な展開能力は皆無と言つていい。そんな所から自衛隊の防衛力で迫りくる相手国を退けるのは難しいだろう」

防衛省に所属しているというステータスのお陰か、単に大男の話し方が説得力がある物だったのか、彼の話す言葉は知識の乏しい十代になってまだ数年と経っていない脳裏に根強く残っていた。

と言うよりも、大男の話す言葉が印象的に聞こえたのは彼の選択した国防の欠陥という話題に少なからず俺の興味が向いていたせいなのかもしれない。

「なら、この国は国防に対してどのような態度をとればいいとお前は思っただ？」

そんな事実もあつての事か、俺は逃げるといふ選択肢を忘れ教師に好奇の目を向ける小学生の様に大男に疑問を投げかけ、それを聞いた彼は待ってましたと言わんばかりに厳つい口元を開く。

「俺はさつきまで自衛隊や在日米軍の戦力を指摘してきたが、実際に戦争の勝敗を分けるのは核兵器を基幹とする優秀な大量破壊兵器をどれだけ保有しているかどうかに依存している面もある。どんなに優秀な軍隊を保有していても核兵器とミサイルを発射するボタンを押すための人差し指が与える抑止力は非常に大きい。大量破壊兵器が強大な師団や巨大艦の進行を防ぐ事ができる事実。それが核抑止力という平和を維持する為の最悪なシステムが安定している所いだ。だが、核抑止力には大きな利点もあるが、同時にいくつかの弱点がある。現代の核兵器は技術進歩と共に性能が向上し、たった二発で地球の生命をほぼ奪えるようになったが、それだけ威力が高ければ自国の放射能の影響も深刻だし、敵拠点を無傷で奪い取るという戦略兵器としては核兵器は威力が高すぎる。さらに、歴史上に大量破壊兵器を用いた最悪の殺人者と刻まれる事と自分が大量の同胞をゴミ虫の様に殺す事を考えれば、そう簡単には発射スイッチを押す事は出来ないだろう。しかし、その事を考慮したとしても核兵器は非常に優れた兵器であり、強力な核を大国同士が保持する事で発生する核抑止は今日まで大規模な国家間戦争を防いできた」

大男はそこで震わせっぱなしの声帯を止め、咳払いで一度話を切った。

「その途方も無い破壊力と、広範囲に拡散する死の灰により実戦というよりも抑止の為の兵器という意味合いが強い核兵器、それを基幹とした陸海空軍を整備すれば強大な軍事力が完成する。今のアジアにはそんな強大な軍備が備えられた国は数えるほどしか存在しないが、今後そんな国が増える可能性は非常に大きいだろう。それに核兵器は輸送手段とセットで持つ事で他の軍備を疎かにしたとしても情勢と地政学によっては大きな脅威と抑止を周囲に与えることが

できる。そのいい例が北朝鮮だ。ただえさえ貧困に悩まされている国民を余所に、あの国は核軍備こそが富国強兵への道と信じて核の開発と生産を続けてきた。このまま軍備拡大を続ければ間違えなく北朝鮮は財政破綻を起こすだろうが極限状況に陥った国というのは何をしでかすかわからない」

序

「近い将来、国家の存続という極限状況に置かれた彼らは停戦しているだけでまだ戦争状態の韓国に侵攻するかもしれないし、周囲の国々に見境なく核弾頭をばら撒きだすかもしれない。失う物を無くした人間、死を前提とした人間の集団というのは非常に恐ろしい、何故なら彼らは時に大国すら沈める程の力を持つ場合があるからな」

大男の話す言葉はあながち間違えでは無かった、背水の陣という言葉が物語るように失う物を無くしたり死を前提とした人間は場合によつては非常に大きな脅威を与える。

過去、旧日本軍の神風特攻隊が圧倒的優勢に立つ米海軍に非常に大きな精神的打撃を与えた事実や、核抑止の中において核保有国同士が武力衝突を起こした場合、劣勢国が優勢国に向かい核発射を断行する可能性がある事実が核抑止の弱点として数えられてる事がそれを裏付けているからだ。

「核保有国の増加、アジア諸国の急速な軍事化、そして政治的、財政的に追いつめられている核保有国の脅威、そんな中でこの国は国防の一部を保護者であるアメリカ合衆国に委ねて、考える力を残しながら十二歳の子供へと退行し、外界から身を守る術と確固たる抑止力を同時に失った。今の世界情勢なら、そんな状態でもこの国は抑止力を確立してアジアの中で繁栄を続けられるかもしれないが、数年後、十数年後はどうだろうか？。急速な軍事化を行う中国や核の保有を進める北朝鮮、そしてそれらの後方に立つ大国の陰、それらを考慮すれば今のままの防衛力では下手をすれば日本という国が

アジアの版図から姿を消しているかもしれない。“世界情勢は常に変わりゆき不変な物ではない”、その事を考慮した時この国に必要な物は核の保有でも同盟国アメリカからの抑止力の援助でも無い、外界から身を守る確固たる力、“新しい抑止力”という確立された力だ”

自身の声が路地裏に低く響き渡り、その音響が静かに消えてゆく様を真剣な面持ちで確認した大男は、スーツのポケットに手を突っ込みながら俺の方にゆっくりと進む足を向ける。

「実を言うとその新しい抑止力の構想は防衛省によって実現されている。対歩兵、対陸上兵器、そして最後には対核兵器といった兵器や人間に対する対応力に富み、それでいて他国からの借り物では無い絶対的な防衛力である“新しい抑止力”。それを確立した物にする為に俺は今日、わざわざ時間を割いて殺人を犯したお前に会いに来たんだ」

「抑止力を確立する為に俺に会いに来た？、一体どういう事だ」

ポケットに突っ込んだ手をそのままにして鋭い眼光を携えた目で見降ろす大男に対し、それに負けないように睨みつけた俺は目の前に立ちはだかる長身にそう問いかける。

大男の腕が電撃的に動いたのはその瞬間だった。

大木の様な拳が素早くポケットから出現すると同時に腹部に鋭く、そして重い鈍痛が走り、臓腑が押し上げられる感覚を味わったと同

時に俺は硬質なアスファルトに倒れ込んだ。

腹部に大きな力と衝撃を受け取った瞬間は自分の身に一体何が起ったのかわからなかったが、胃から食道を伝って逆流する胃の内容物と全身から噴き出す脂汗、そして右の拳を前に出したまま不敵に笑う長身が全てを自分に理解させた。

自分が大男に腹部を殴られ、冬の冷気を孕んだ風に冷やされたアスファルトに倒れ込んだという事実を。

「確立された防衛力を実現するためには現在の自衛隊の人員では到底不可能だ。何故だかわかるか？」

うめき声を上げ、腹部に迸る痛みに必死で耐える俺に向けて大男は驚くほど伶俐で鋭い声で問いを投げかけるが、無論、痛みに耐える事に全神経を集中させる俺にはその声は届かない。

「わからないのなら教えてやろう、彼らは人間の死という人間の精神に最も影響を与える出来事を経験していない。実際に戦争に参加した狙撃手の中には数十人も殺せば精神が崩壊し、自分の口に銃口を挟み引き金を引いて自殺する者もいたと聞く。そんな生半可な精神力では人を殺すという特殊で人の理念に反する行動を躊躇無く行う事は出来ない。そこで国家は殺人を犯した少年少女、その中でも躊躇なく、そして効率的に生命を奪った者だけを特殊戦闘員養成プログラムに参加させるという法案を国会に通さずに成立させた。つまりお前は殺人犯として服役する義務を免除される代わりに防衛省の非正規戦闘員として兵役のような物が科せられる」

一体、こいつは何を話しているんだ……？

腹部に拳を受けた事により極端に能力を低下させた五感でも大男の
声は疎らに聞き取ることが出来たが、痛みを受けた局部に精神を集
中させる脳髄では彼の話の趣旨は理解できない。

そんな中、機械的に噴出した涙で霞み行く視界に腰のベルトに右手
を持ってゆく大男の姿が映った。

序

「何を……する気だ？」

途切れ途切れでも強く声を絞り出した俺を無視し、大男はベルトに装着されたホルスターに装備された金属の塊を静かに引き抜く。

トカレフTTT - 33

本来必須な筈の安全装置すら省略した徹底単純化設計で、生産性向上と撃発能力確保に徹した拳銃であり、過酷な環境でも耐久性が高く、かつ弾丸の貫通力に優れる旧ソ連製の自動拳銃。

この時俺には拳銃の種別を判断する知識は無かったが、大男がホルスターから抜いた拳銃に見られたスライド側面の精巧な滑り止めは正にトカレフのそれと判別出来た。

「何って、少し眠ってもらっただけだ」

笑みを浮かべる顔をそのまま俺の問いに答えた大男は、トカレフの銃身を握り、俺の頭を押さえながらその場にしゃがみ込む。

「安心しろ、悪い様にはしねえよ」

そして、そう言い放ったと同時に大男は手に握ったトカレフを振りかぶり、俺の首めがけてそれを振り下ろした。

抵抗する暇も無く、肉を打つ鈍い音と強烈な衝撃が同時に走り、急速にアスファルトとビル群の足元を見る視界が暗くなる。

「こいつを車に運び込め」

視界が完全にシャットアウトし、聴覚も続いて機能を停止させようとしている状況で、大男が他の人物に言い放ったであろう無機質なその言葉がまどろみの中で聞いた最後の言葉になり、俺の意識は現実へとゆっくり引き戻されていった。

*

深い深い泥沼の様な意識の中、最初に像を結ぶのは白く強い光。それが天井に張り付いている電灯の光だと分かる頃には、寝起き特有の倦怠感が全身を支配していた。

完全に覚醒しきつてない朧げな聴覚を貫いた重厚なエレキギターの音に、天城 纏は重い瞼を静かに開ける。

しかし、ずいぶん昔の夢を見ていたようだ。

そう感傷に浸っていられるのも数秒の間、キレのいい渋いイントロが終わり有名スラッシュメタルバンドの特徴的なボーカルの声がり

フに乗り始めた事を認識した体は反射的に布団から飛び起きていた。普段なら全身を支配する倦怠感に負け、再び布団をかぶる筈だったが今回はそうはいかない様だ。

何故なら、久方ぶりに直視した光に細めた目が直視した先に、目覚ましの音ではなく“勤め先”からの着信音を振りまく携帯電話が存在していたからである。

「今日は非番の筈だろ……」

布団のすぐ近くに鎮座しているテーブルの上でテクニカルなギターと特徴的なハスキーボイスが混ざり合い、一つの芸術とも呼べる音響を発している中、纏はそう短く呟き左手を伸ばして携帯を手に取り通話ボタンを押すと「はい」と一言電話口に吹き込む。

(指標アルファ、地点は防衛省正面玄関から200メートルのビル屋上、地点に向かう時にはゴルフバックを持参しろ。あと、迎は十五分後に寄こす。以上だ)

ここ数年、週に一回は聞いているであろう低く、どすの効いた男の声はそれだけを告げると電話をすぐさま切った。

当局からの緊急招集。

この“勤め先”に世話になってからは嫌というほど経験している休

日出勤でも、急に叩き起こされて仕事に向くのは自分に合っていないらしい。

大きなため息をつき、折りたたんだ携帯電話を軽く布団の上に放り投げた纏は洗濯物の山の中から皺の少ないトレーナとジーンズを引っ張り出し、今は塞がっている左手の代わりに右手でテーブルに置かれた緑茶のペットボトルを鷲掴みにする。

薬指と親指でペットボトルの蓋を開け中の緑茶を口の中に流し込み、反射的に時計を見ると既に午前一時を回っていた。

現在時刻は一時、報告書を書かなければならない事を考えると今日は朝方までかかるか。

そう内心で呟き舌打ちをした纏は渋々ジャージを脱ぎながら、再び蓋をしたペットボトルの代わりに握ったリモコンでテレビの電源を入れる。

序

主電源が入ってから数秒のタイムラグの後に徐々に画面に現れたのは深夜のバラエティ番組の物である。芸人の驚愕した表情で、同時に聞こえてきた大声でのツツコミに対しさらに苛立ちを感じたのか、チャンネルを変える事無く速攻で主電源のスイッチを切った。

「この時期じゃプロ野球のダイジェストすらやってないか……」

仕事先にも機械にも急かされ、今の自分には余裕がない事を再認識すると壁にハンガーで掛けられていたコートを手に取り、それを一息に羽織った。

背中への刺し傷からどす黒い液体を流し、恐怖に表情を固められながら死ぬ二つの肉塊。

年季の入った黒色のコートを羽織った瞬間、鼻腔を刺激した煙草の香りが不意に数年前の殺人現場の情景を思い出させる。

あの日から俺は一切の情を撤廃し、自己を正当化する為に今日まで生きてきた。

だが、虐待に耐え自立する好機を待つ道も、普通に少年刑務所に服役し贖罪の道を歩む事も出来た筈だ。

そんな中俺は両親を殺し、その罪を被る事無く必死で負債を踏み倒す事に徹して来た。

今考えると俺の選んだ道は正しかったのだろうか？

「まあいい、さっさと予定地点に出向くか」

今さら選んだ道は変えられない、もし自分が間違った道を歩み失敗したとしても俺は自身の信念と一緒に心中するだけだ。

まるで脳裏に浮かんだその情景に駆り立てられたかの様に纏はそう吐き捨てると、壁に立て掛けてあったゴルフケースを背負い玄関へ続く扉に向かって踏み所のないくらい整理されていない部屋を慎重に歩んでゆく。

*

それにしても、先ほどの夢と言いついてコートに染みついた煙草の香りと言いついて、今日は妙に昔の事を思い出す日だ。

そう心中で呟き“雇い主”から与えられた寂れたアパートのドアを開くと、そこには満天の星空が広がっていた。

想像以上に冷たい冬の風を浴びながらも夜空に輝く星空は力強くその光を夜の帳に包まれている地上に振りまいている。

纏の目線の先に広がる光景、これを見た人間は殆どが知らず知らずのうちに幻想的な星達に目を奪われ、“美しい”と心中で呟く事だろう。

「思ったより寒いな……」

しかし、吹き付けられた物体を全てを凍てつかせてしまうのではないかと心配してしまうほど冷たい冷気に、丸出しにした両手をポケットに納め、星空を見上げていた顔を俯かせた纏はやはり無機質な目を露にしていた。

数秒後、顔星空に微塵の興味すら抱かない無機質な目はコンクリートで造られたアパートの扉の切れ目から覗く一台のワゴン車を注視する。

夜陰に紛れる黒く鈍い光を反射するハイエース、それが“勤め先”が寄こした迎だと気付いた纏はゴルフケースを背負い直し、黒塗りのそれへと足を進める。

ここ最近、妙に“勤め先”からの緊急招集が多い、それも今日みたいな深夜にはかり呼び出される。

全く、上層部には少し現場で働く人間の苦勞を知る必要がありそうだな。

顔を顰め、言葉に出来ない愚痴を漏らしているうちに、ハイエースとの距離は数メートルまで縮まり、ゴルフバックを背負った纏の存在に気付いた車内の男がウィンドウを開いて顔を覗かせる。

「識別番号00番、天城 纏」

顔を覗かせた四十代前半の男に自分の顔写真と識別番号、それに特殊なICチップが埋め込まれた手帳を差出し、そう抑揚の無い声を放つと、車内から顔を出した彼は特殊な端末を手帳のICチップに翳し、何やらボタンを操作し始めた。

傍目から見れば夜陰に紛れて車内の人間と麻薬を取り引きしてる哀れな中毒者に見えなくもない。

実際に事情を知らない警察官に数回ほど職質をかけられた事もあったが、ここ最近“勤め先”が警察にまで介入してきたのか仕事をする時には警官の姿すら珍しくなった。

その事を考慮すれば、上層部の連中も治安組織に圧力を掛けるだけの仕事の為の道具を調達するだけの色々と苦労があるのかもしれない。ボタンを操作し始めてからほんの数秒、本人と識別できた証拠である短い電子音と端末に表示されているであろう認証の二文字を確認した中年男性は「乗れ」と一言だけ呟くと、外を吹き荒れる冷風から身を隠すかの如く車内へ顔を戻す。

パワーウィンドウが作動し、中年男性の顔が半分ほど隠れた事を確認した纏は、大きなため息をつく。ハイエースのスライド式ドアを開け、車内ラジオの音がうっすらと聞こえる後部座席へと乗り込んでいった。

序

*

ハイエースの車内に入った瞬間冷たい外気が肌を突くのを止め、全身を温かい暖気が急激に包んでいった。

流石に車内は暖かいみたいだな。

纏はその様な外気との急激な温度差にひっそりと片眉を吊り上げたがそれも一瞬の事、車内には暖房が備え付けられているのだから当然だなと一人で納得した彼は静かに溜めた息を吐き出した。

そんな温かい車内に身を潜り込ませた纏は先ほどまでポケットに突っこんでいた両手を外に出し、荷物も小物も置かれていない殺風景な後部座席に静かに座り込んだ。

それと同時にアクセルが踏みこまれ少しずつ加速を始めるハイエースの後部座席で、座った彼は肩に掛けていたゴルフバックを慎重に足元の床へ降ろす。

ゴルフバックを置く為に上体を折り曲げた時に鼓膜を揺らしたガソリン機関の音、スピーカーから無意味に流されているカーラジオの音、現在車内に流れている音響はその二種類で、纏も運転を担当している中年男性も一切声を震わす事無く、先程から沈黙が車内を支配していた。

そんな沈黙は纏にとって会話により発生する無駄なコミュニケーション

ンが無い分、仕事をするにおいて好都合だったが、運転席の中年男性はそうでも無い様だ。

パワーウィンドウから顔を出した時は表情を一切変えなかった運転手だが、バックミラーに薄らと映る今の彼の表情は恐怖と背信感により引き攣つてる様にも見える。

恐らくこの中年男性は“当局”に新しく雇われた新人、当然、纏を迎える前に今回の業務内容についてしっかりと説明が施されているだろう。

そうでなければ、引き攣つた亡霊の様な顔をせずに、能天気な様子で世間話でも持ちかけている所だ。

彼は目的地に纏とゴルフケースを送り届けた後に起こる惨劇を想像し、心を耐えがたい戦慄に浸食されているのだ。

バックミラー越しに運転手の顔を一瞥した後にゴルフバックを床に置き座席に上体を預けながらふと横を見ると、真っ暗な住宅街を背景に街頭の光という人工の光と自然が生み出した星の輝きがそこに一枚の巨大な絵画を創りだしていた。

そろそろ季節も冬、また一年が過ぎるか……。

玄関を出た時に身体に吹き付けた冷風、それに車内にかかっている強めの暖房、そこから秋も終りに近づいている事を理解した纏は窓の外に広がる巨大な絵画を何となく眺めている事にした。

何処か薄黒いウィンドウに映りだす巨大な絵画はハイエースがアスファルトを走るに従ってその姿を徐々に変化させてゆく。

この仕事を始めてからというもの、時間が過ぎるのが早いな。

星と街頭の光をそのままにして先程まで何処か優しげな絵を創りだしていた住宅街は徐々に姿を潜め、高層ビル群とそこから漏れる強い明かりが上空から降り注ぐ優しい光を蹂躪する攻撃的な絵画に姿を変える。

そんな窓から見える光景の急激な変化は纏の脳裏に一つの感傷を浮かび上がらせた。

(今日は11月15日月曜日、時刻は午前一時半を回りました)

今まで聞き流していたカーラジオからなじみ深い日付が聞こえてきたのは、丁度その時だった。

深い戦慄や思い入れの深い出来事を感じた日が脳裏に染みつき、毎年その日になるとその出来事に関する夢を見たり、無性に何かが引っ掛かる感覚を覚えたりするのは講談本の中の話。

そう思っていた纏にとって今日見た夢や車内から見える光景から感じた感傷は、非常に意外な物に感じられた。

だが、カーラジオから電波を介した先に居るアナウンサーが言い放った日付は確かに脳裏に浮かんだ感傷を増幅させ、そして記憶野の奥深くに眠る一つの記憶に手を伸ばしていた。

血に濡れた三体の死体を照らす夕陽の光。

会社から自宅へ帰るサラリーマンや買い出しに来た主婦で埋め尽くされた満員電車。

自身の目の前に立ちはだかる大男。

アスファルトに落下して硬質な音を立てる大振りのナイフ。

腹部に走る鈍痛と、まだ見ぬ事実との邂逅。

そう、六年前の今日十一月十五日は彼が大男により現在の職業に就いた日であり、自分の両親と第一発見者になる筈だった主婦を殺害した日だ。

人間の記憶は不思議なものだな。

理性では必要ないと思っている出来事すら記憶として記憶野に溜めこみ、その出来事が鮮烈で印象深い事であるほど色濃く記憶してしまふ。

序

強烈な血の赤色に染められた六年前の11月15日のように。

高層ビル郡が建ち並ぶ都心部から降り注ぐ人口の白い光を受けながら疾走するハイエース。

ほぼ無音の車内に響き渡るカーラジオに駆り立てられる様に、纏いは記憶野の奥に睡る記憶を脳裏に引き寄せていった。

*

まず初めに感じた感覚は割れそうになるほど強烈な頭の痛み、そこから目を開けると霞みかかった視界と全身にのしかかる倦怠感が自身の全てを支配していた。

「うつ……」

それから数秒後、腹筋周辺の鈍痛と胃の内容物がかき混ぜられた事によって発生した不快な気分により、短い呻き声が覚醒しきっていない聴覚にこだました。

不敵に笑う大男の大木の様な腕が拳を放った瞬間。

腹部に走った、内蔵を破壊するほど大きな衝撃。

ホルスターから放たれた死を運ぶ黒い鋼鉄の塊。

そんな中で急速に脳裏にフラッシュバックした数刻前の出来事に、
どうやら記憶だけは正常らしいな、と俺は一先ず胸を撫で下ろし、
頭痛が残る頭に手をやりながら状況の把握に力を傾ける。

コンクリート製の壁に貼り付けられた真っ白な壁紙に包まれた四畳
半の部屋に、よく一般企業で使われそうなありふれた執務机に自分
が座っている椅子、俺が意識を戻した場所は異様に殺風景な一室だ
った。

まるで何処かの留置所や収監施設の様なその部屋に存在する三十セ
ンチ四方の曇りガラスは六本の鉄格子で覆われ、外界との繋がり
殆どを奪い取っている。

そんな中で唯一、部屋と外界との繋がりを保持させていたのは執務
机の後方に位置するドアだった。

普通の住宅で使用される木製やプラスチック製のドアと違い、冷た
く硬質な金属元素で構成された重厚な扉は、やはり刑務所や留置所
といった収監施設を連続させる。

更にその異様な威圧感を放つ扉は俺に数刻前耳にした大男の言葉を
思い出させた。

“お前は殺人犯として服役する義務を免除される代わりに防衛省の
非正規戦闘員として兵役のような物が科せられる”

数刻前に耳を貫いた鋭い大男の言葉、そこから考慮すれば目の前に
存在する硬質な扉は防弾性能や耐衝撃性能を考慮したうえで設置さ
れたものだろう。

そこから更に、自分が隔離されているこの施設を詮索しようとした俺だったが、その行動は無駄だという事がすぐに分かった。

何故なら、鋼鉄の扉を一枚隔てた先からでもこちらに歩いて来る機械的な足音がはっきりと耳に聞こえたからだ。

恐らく現在聞こえている足音は先程俺と対峙した大男の物、そうであれば自分を隔離した彼は俺を追った理由や現在の所在地を話し始める筈だ。

それならいちいち余計な詮索をする必要はない。

そう自分に言い聞かせた俺は、痛みは少し衰えたものの未だに脳髓を刺激する痛みに悩まされながら鋼鉄の扉から目を執務机の中心に向け直す。

その直後、規則的に聞こえていた足音が消え去りパソコンのキーボードを叩く様な音が聞こえてきたと思っただのはつかの間、直ぐにそれは電子ロックの解錠音と金属が僅かに軋む音に姿を変えて行った。

「入るぞ」

短い考察の後に聞こえてきた野太い声、その声の主を知らながらも先程前に向き直した体を後方に向ける。

「なんだ、さっきと比べて随分とおとなしくなったな」

そこにはやはり、数十枚にも及ぶ書類とボールペン等の筆記用具の類が入っているであろう革のケースを手にした敵つい顔が悠然とした目で此方を見据えていた。

「まあ、気絶から意識が戻って間もないから仕方ないか」

一体誰が気絶させたと思っっているんだ……

口元を緩めながら執務機の裏手に回る大男、自分と違い余裕に満ち溢れている彼にそう言葉をぶつけてやりたかったが、あの時の俺にはそんな気力は残されておらず、精々横目で睨みつける事で手いっぱいだった。

そんな本調子ではない自分をよそに、大男は手にした書類の束とペンをケースを雑に執務机の上に放ると何処からともなく、いや執務机の裏に立て掛けてあったであろうパイプ椅子を開き、巨大な体軀をそれに鎮座させる。

序

「さて、纏だつたかな。さっきは手荒い方法を使って悪かった、一先ずそれについて謝っておこう」

巨体を鎮座した後、大男は悠然とした表情を崩し、そう言いながら申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

その行為は恐らく俺の心情を少しでも落ち着かせるために行った表面上の行為だろうが、二、三秒後に上げられた大男の顔からはしっかりと謝罪の念が滲み出していた。

「曇りガラスと鉄格子、それに電子ロックの掛けられた鋼鉄製の扉。さしずめこの部屋は防衛省内部に設けられた収監施設といったところか」

頭を上げた後に脇に放られた書類の束を掴み手元に引き寄せる大男、彼が思うよりずっと冷静な理性は謝罪以外に何も語り出そうとしない長身に一瞬の詮索で得た答えをぶつける。

「状況の飲み込みが早いな」

そんな俺の言葉に対して大男は少し驚いたような声色で返答を寄こすと同時に、紙の束の中から一枚目の書類を執務机の上に滑らせた。

「そう、お前の言う通りこの部屋は防衛省内に設けられた収監用の一室だ。まあ、俺の様な限られた人間しか知らない施設だがな」

更にそう続けた大男は読めと言わんばかりに人差し指を俺の目の前で静止する書類に向ける。

大男の指示した通りに、俺は目の前の書類を手に取り細かな文字で構成されたその文書に目を向けた。

書類上部には細かな文字、そして下部には氏名と捺印を押す枠で構成されていたそれは何かの同意書にしか見えなかったが、目を配ったのは最上段に書かれている書類の名目と、そこから数行読み進めた先にある規約の一文だった。

P S F 加入同意書。

書類上部に色濃く印刷された何かの略称であろう三文字のアルファベット。

そして……。

「入隊者は戸籍上の記録を完全に抹消され、入隊以前に関わっていた全ての人間との関係を失う」

数行の文で構成されていた入隊規約の文章、その中で最も鮮烈で強烈に脳裏に食い込んだ一文、それに少しの動揺を覚えた俺は強張ら

せた表情を一瞬崩し、思わずその一文を口ずさんでいた。

戸籍上の記録を完全に抹消し、家族や親戚、親友との繋がりを完全に断ち切る、そう理性に投げかけた無機質な文字が望む事はただ一つ。

今まで歩んできた人生を抹消し、それに後腐れを作らず新しく特殊な人生を歩む人間を生み出す事だ。

自分がトカレフの銃床で殴られ、意識を失う前に大男が話した簡単な防衛論、核抑止力消失の可能性、そして現在進行形で構成を進める“新しい抑止力”。

まだ記憶に新しいそれらの情報と自身の目に映る文字を考慮すれば、この同意書と腰に可動式の金具で取り付けた携帯灰皿を取り外す大男の言いたい事がすぐに理解できた。

「つまり、自衛隊より装備と戦闘能力で上回っている特殊部隊、新しい抑止力”に俺を取り込む。そういう事か？」

狭い収監室に響き渡った冷静な声、それにより携帯灰皿の蓋をスライドさせる大男の手が一瞬止まった。

なにくわぬ顔で携帯灰皿を取り出し、一服を入れようとした瞬間に響き渡った硬質な言葉。

それにより生じた一瞬の動揺。

まるでそれを境としたかの様に自分と大男が存在している四畳半程のスペースから主旋律とも言える会話が消え、代わりに収監室を取り囲んでいるであろう防音壁が彼との間に静寂をつくりだした。

防衛省周囲を取り巻いている都市の喧騒を遮断する完全防音の収監室。

その中で全く音響を発しようとせず鎮座している椅子や執務机。

互いに沈黙を決め込んだ二人の男がつくりだす音響が消失した世界、それはその空間に存在する者に重圧を与え、口を開く事を許そうとしない。

「少し話をしよう」

だが、実際に凄まじい圧力を誇っていた静寂が収監室を包み込んでいたのは、ほんの数秒の話。

蓋が開き中の吸い殻を露出させた携帯灰皿を執務机の上に置いた大男は、静寂のつくりだす重圧を気にする事なく口を開いていた。

序

そんな彼が放った一言と彼の表情に浮かび上がったきた不器用な笑み、それが俺が先程放った問いの答えだった。

厳つい顔で不器用な笑みは、書類に目を戻し難しい顔を浮かべる俺に対し静かに口を開き、淡々と語り始めた。

「第二次大戦中広島と長崎に落とされた二つの原子爆弾、現代社会における核抑止力の確立はそこから始まった。少量のウラン、プルトニウムから成る原子爆弾は同量のTNT爆薬とは比べられない程の威力で広島、長崎を壊滅させ窮地に立たされているにも関わらず降伏を申し入れようとしない日本の首脳陣に対しての決定打を發揮した。米国が投下した二つの怪物は膨大なエネルギーで人間、建物を溶かし尽くし、発生させた爆風で都市に大きな爪痕を残した挙句、自身の持つ放射能という見えない病原菌で生き残った人間を片っ端から殺しにかかった。そんな事実から日本国民、いや全世界の人類に戦慄を与え同時に根絶を願われている核兵器だが、終戦後の列強各国からすれば相手国に圧倒的な損害を与える超兵器、つまりは全世界を支配しかねない究極の力だ。大戦後の世界を二分した、アメリカ合衆国を盟主とする資本主義・自由主義陣営と、ソビエト連邦を盟主とする共産主義・社会主義陣営はその究極の力を研究し威力を更に高め、確実に仮想敵国を叩き潰せる量を揃えにかかった。これが歴史上で冷たい戦争と言われているアメリカとソ連の大幅な軍事拡張だ」

そこで大男は話を一度切ると、ポケットからまたもや煙草の箱とラ

イターを取り出し、火をつけた煙草を口に持つていく。

「核兵器の研究、増産を皮切りに朝鮮戦争やベトナム戦争を引き起こしたアメリカ合衆国とソビエト連邦、その対立は戦力増強を繰り返す毎に深まり、ソ連の大型爆撃機をアメリカのジェット戦闘機が執拗に追い回す事も珍しくはなくなった。そんな中、戦争で破壊された戦車、戦闘機の修理や、これから前線に送りだす兵器の製造をアメリカは敗戦から復興に向かい始めた日本に一任した。それにより、まだ復興途中にあった日本は高度経済成長を迎える糸口である朝鮮特需が起こり、経済水準が凄まじい勢いで戦前レベルまで回復した。そんな事実もあり冷戦は対峙する二対の戦闘国家に大きな利益と技術革新をもたらす筈だった。しかし、実際には大幅な軍備拡張による莫大な資金によりソ連とアメリカは徐々に疲弊し、最終的には冷戦に終止符を打つに至った。これが何故だかわかるか？」

二都市に落下した巨大なエネルギー、その威力に目を付けた二頭の巨人、対峙する戦闘国家と巻き込まれる隣国、そして冷戦の終了。

長口舌の中で不意に投げかけられた問いに対し脳裏の中で今まで聞いた複数の単語を反芻する俺が答えを考え出す時間はそう長くはなかった。

「簡単な事だ、普通、戦争という物は兵器の膨大な需要と供給を繰り返す事によって生まれる特需景気、更に戦勝国は敗戦国から賠償金や領地を奪う事により人員や兵器の損失を埋め利益をつくりだしている。だがソ連とアメリカ間で起きた冷戦は核兵器を基幹とした軍備の増強による国庫の損失に対し、主要な戦争は朝鮮戦争とベト

ナム戦争くらいしか見当たらない。つまり供給ばかりが先走りして生産した兵器を消費する事が無いうえに戦争による収入が支出より明らかに少ない。そんな状況では膨大な支出を伴う冷戦は続けられないだろう」

先の問いかけから数刻と経たない内に返された返答、それに対し大男は再び歪めた口元から煙草の白煙を噴き出しながら、その蔑つい顔でこちらを見据えていた。

「成程、ご名答だ。お前の言う通り冷戦は互いに張り合い軍備を増強させるだけで実際に行われた戦闘は二度行われた世界大戦には到底及ばない。これにより需要と供給、戦闘による損失の関係が完全に崩れ、対峙する戦闘国家は需要と供給だけが先走りするバランスが崩れた状態をつくりだしてしまった。更に両国の頭を悩ませたのが核兵器の移送手段の開発だ。旧世代の核爆弾はマサチューセッツ工科大を出ていない普通の工業大学生でも設計図と材料さえあれば製作可能という簡易的な代物だったが時代が進むごとに小型化が進み、1950年代には単座の爆撃機に搭載可能なまでに小型化された。しかし、当時のソ連とアメリカは核兵器こそ持っていたものの核兵器を相手国上空に運搬する手段は、攻撃目標に選定されやすい空港から離陸し、戦闘機の直掩がなければ対空戦闘能力が無に等しく目標到達時間が必然的に長くなる大型の爆撃機での投下しかなかった」

序

「第二次世界大戦後よりも機体の剛性や速度が上昇しているとはいえ長距離を移動し目標に核爆弾を投下して戻ってくる爆撃機には戦闘機の直掩はつけられないし、航空技術と同様にレーダ技術も向上している訳だから攻撃されていない飛行場、又は海上の空母から発進したとしても敵国のレーダーに機体が探知されれば瞬く間にジェット推進の迎撃機が飛来して機体ごと核爆弾が撃ち落とされる。それは一撃必殺を前提とする核兵器にとって大きな問題であった。いくら強力な兵器であっても敵国の上空に到達しなければ粗大ゴミの価値にすら満たない。その事を理解していた両国が、安定した核の輸送手段を探し求めて目をつけたのが第二次世界大戦中ナチスドイツで開発・運用が行われたV2ロケットだ。強力な推進力で大気圏を突破し宇宙空間までその巨体を上昇させるロケット。それを応用すれば大気圏飛行を行い、戦闘機の迎撃を受ける事無く敵国上空に迅速に核爆弾を送り届ける事が出来る。すなわち核爆弾搭載の弾道ミサイルと登場だ。ロケットに小型化された核爆弾を搭載する事で生まれた核弾道ミサイルは非常に的確で優秀な核攻撃方法として当時の大国に受け入れられた。何故なら発射後凄まじい速度で大気圏まで上昇し、その後、慣性を利用しながら高速で目標に突入する弾道ミサイルは迎撃が非常に困難であり、更に迎撃率が非常に低いからだ。そういった優れた面をいくつも見せる核弾道ミサイルは冷戦が生み出した最大にして最高の兵器だと言えるが、いくつかの問題を抱えていた」

そこで話を切った大男は三分の一ほど吸った煙草を携帯灰皿の縁で軽くはたく。

「核爆弾自体はモノさえ選ばなければ普通の工科大学生にでも製作できる。だがその核爆弾を小型化したり派生させて行くには巨額の研究資金を必要とするし、核を搭載する弾道ミサイルや原潜の維持費や老朽化した装備の更新費もその中に含まれてくる。具体的な核戦力の維持費は国家機密だが恐らく年間数兆単位の軍事費を必要とするだろう。そんな極めて手がかかる核兵器を相当数揃えていたら国庫の負担は莫大な物になり、財政破綻までは行かなくても国庫の占める軍事費の割合は相当な物になる。この事からアメリカとソ連間に生じた冷戦が終結した陰には膨大な軍事、核軍備拡大による国庫の負担が両国にのしかかっていた事がわかる。だが、そんな国庫の疲弊を度外視してまで両国は核兵器を量産し続け、大量の弾道ミサイルや核搭載原潜の製造を行い、今日では核実験を成功させ核兵器を保有するに至った国は八ヶ国に増え、さらに核兵器の保有疑惑をかけられている国まで出てくるようになった」

大男の話す様に、核兵器を保有する国は年々増え、当時でも北朝鮮やイラクの核保有疑惑をメディアが報じたりもしていた。

国内の貧困を度外視したとしても核開発を続ける北朝鮮や、冷戦時に核兵器が大量生産された事実、そして現在も外交から抑止力にまで多大な影響を与える核弾道ミサイルの存在を考えれば、資金面の問題を差し引いたとしても釣銭が戻ってくるほど核は優秀な兵器だと理解できる。

しかし、一度話を止めて煙草を吸う事に意識を傾けた大男を見据えていた俺は一つの疑問が頭に思い浮かんでいた。

核兵器は小国ならば一撃で敗戦まで持つていく凄まじい威力と後に

残る放射能の影響で生物を焼き尽くし、広大な不毛の地を創りだすほどの力を秘めているし、開発や保持に莫大な資金を必要とする弱点も持っているが保持しているだけで外交面で役に立つカードにもなりゆるなど、軍事的な利点の他に政治や外交にも大きな影響を与える事が出来る。

だが、あの時機に置かれていた一枚の書類、“新しい抑止力”へ参加する為の同意書は核抑止力を完全に否定し、それに代わる新たな抑止力の可能性、すなわち対人、対陸上兵器戦に特化した特殊戦闘部隊が核兵器の与える影響を超えるというこの国の見解を表わしていた。

核兵器もそうだが自衛隊より装備と戦闘能力で上回る戦闘部隊の創設、恐らくそれは当時、いや現在の日本の置かれている立場からしても到底無理な話だ。

第二次世界大戦終了後、天皇の立場を守るかの様に武力抵抗と軍事的抑止の撤廃を盛り込んだ日本国憲法を施行し、世界一平和的で同時に他国に蹂躪される可能性を飛躍的に上昇させた日本。

序

今でもその“一國平和主義”を守り続けるこの国は、自衛隊の装備一つでメディアが大騒ぎし、今まで通りの平和な生活が永遠に続く信じ込んでいる国民は政治に目を向けようとしないし、世界情勢を知らない熱心な似非平和主義者は頑なに今の体勢を守ろうとし、他国へ対して唯一の防衛力となる自衛隊の装備すら縮小を訴えている。

百歩譲って秘密裏に自衛隊を超える戦闘部隊の創設や核武装を進めていたとしても、その事が外部に漏れればメディアやインターネットから情報が電撃的に伝わり、世論は大いに荒れ、国会に法案を持ちだした者は軍国主義者と揶揄され煮えたぎった世論は政府を一挙に倒しにでるかもしれない。

そのような大きく同じリスクを被るなら自衛隊と別に特殊戦闘部隊を新設するよりも核武装を施した方が他国の軍事水準により近づく事が出来る。

それなのに何故、この日本という国のトップ達は核兵器より特殊戦闘部隊を選んだのか。

「このように純粋な破壊力に優れ、価格の面に問題があっても的確な外交に与える多大な影響などの価格に十分見合う能力を持っている事により一見使い勝手の良い風に見える核兵器だが、実はその裏には一つだけ大きな問題が存在している。」

軍事や世界情勢に関しての知識を専ら親が二人で食事をしてる中、一人離れた所から何となく眺めていたテレビのニュース映像から取り入れていた、まだ幼かった脳裏に浮かび上がった疑問。

吸いきった煙草を携帯灰皿に押し込んだ大男が次に持ちだした話題がその疑問の答えとなっていた。

「それは核兵器が抑止の為に存在している兵器だという事だ」

核抑止力という平和を維持する為の最悪なシステム。

ナイフを叩き落とされ丸腰で大男と対峙した時に聞かされた彼の言葉が不意に脳裏に脳裏をよぎったのは、恐らく核兵器という人類が開発した兵器史上、最強で最悪の兵器が平和を保つ一端を担っていた事が幼い自分にとって衝撃的な事実だったからだろう。

でもそれは仕方がない事なのかもしれない。

社会や歴史の教科書に載っている屋根を吹き飛ばされた広島県産業奨励館や、膨大な熱量で溶かされた皮膚が流れ落ちる悲痛な人間の写真、それらをつくりだした元凶である核兵器という強大な悪魔が世界の中心となっている大国に渡り互いに牽制しあう事で、仮想敵国の兵士に小銃で撃ち抜かれる事も、空爆で焼き尽くされる事も無く平和な日常を送れている事実を知れば誰でも嫌気や衝撃が走る物なのだろう。

何に関しても冷静で伶俐な目に対応していた俺でさえ、寒気と衝撃が同時に全身に進ったのだから。

「通常、兵器という物は敵となった目標を殺傷、破壊するためや、敵の攻撃から防御するための機械装置として存在している。その為、各国は他国よりも優れた兵器をつくりだす為に国内の技術の粋を集め、より強力で扱いやすい銃や、より高速で飛行できる戦闘機を開発し戦線に投入してきた。このように、兵器とは戦闘に参加して多くの人間や兵器を殺傷する為に常に進化し、存在意義を世界に見出させている。それに対して核兵器はより威力を求める事や使い勝手の良い兵器に進化させる事では無く核を持つているという事実に存在意義ができる。何故かという、どんな形でも良いから敵国に持ち込み起爆すれば多大な損害を与えられるという核兵器の特性上、たとえ旧式の核爆弾しか保持していないとしても、それだけで世界各国に十分な恐怖と警戒心を与える事が出来るからだ。つまり、核兵器はどんな形でも良いから物と移送手段を整えれば敵国を滅亡まで追いやる事の出来る巨大な力として存在できる。そうなる、核兵器を持った国を危険視した他の国はその国に対してどのような態度をとるべきか」

携帯灰皿の蓋を閉めつつ放った大男の問いは、今までの話を聞いていれば知識の無かった俺でも容易な事だった。

「核を持った国に対抗する為に自国も核を持つ、そういう事か？」

目には目を、歯には歯を。

かつて古代の文明に存在した法律がそうであったように、相手と対

等な位置関係をつくりだすには自分が相手と同じ立場までのし上がるか、優位に立っている相手を自身の基準まで引きずり降ろすしか方法が無い。

つまり、核兵器を超える力がこの世に存在していない以上、核を持つ国家に対抗するためには自身が核兵器を持つしか方法が無いのだ。

序

「正解だ。現在、核兵器を超える破壊能力を持った兵器はまだ開発されていない。その為、核兵器に対抗するには核兵器を開発し、配備する事により『お前が核兵器を撃つたらこつちも核兵器をお前の国に向けて撃ち返すぞ』という明確な意思と実行力を示す方法が、核に対抗する術の中で非常に高い効果を持っている。実際に現在の核保有国の全ては核兵器を使用せず開発、実験、配備を行う事で互いに圧力をかけ牽制し合う事で均衡を保っている。こうして互いに核を持つ事で相手の核兵器を封じる事を核抑止力と一般的には呼んでいる。人類を滅ぼすかもしれない力を互いに持つ事で国家間の戦闘を防ぐ。一見、下手をすれば核戦争という最悪な結末を生み出しかねない核抑止力だが、核の力を超える物が無いという現在の科学力の実情、核が誇る破壊力と災厄の権現である放射能、何より歴史上に大量破壊兵器を用いた最悪の殺人者と名を刻まれ、言葉や肌の色こそ違うが大量の人間を一瞬で殺害する事を考えればどんな平和論よりも核抑止力の方が確実に国家間の調和がとれる。そんな事実もあり、核兵器で核戦争を抑止するという考え方は全世界に広まり、現在の核保有国は自国の核保有を正当化する事になった。だが、先に話した通り核抑止力には大きな弱点がある」

そう述べた大男は一度そこで話を切り、咳払いをして喉の調子を整えると、少し難しい顔をしながら話の続きを語りだす。

「まず一つ目の弱点としては敵国の先制攻撃で自国の報復能力が失われた場合だ。例えば二つの国家間の関係が非常に劣悪になり、A国がB国に向けて核弾道ミサイルを発射したとしよう。普通なら弾

道ミサイルは様々な迎撃を受けながらも大概は撃墜される事無く敵国で起爆する。そうした場合、B国がとる行動は核抑止力に基づく」とA国に向けて報復としてミサイルを撃ち返すという事になる。しかし、A国の核弾道ミサイル攻撃でB国のミサイルサイロや核搭載原潜、ミサイル基地が全て破壊されてしまえばB国は完全に反撃能力を失い、敗戦する。この様に核抑止力というのはこちらが核を撃てば相手も核を撃つという互いに牽制し合う事により核戦争のリスクを最低限まで下げて、核戦争が起こったとしても両国で使用される核の量を抑制する効果があるが、どちらか一方が報復能力を失ってしまえば核抑止力の意味は無くなる」

そこで再び話を切り、少しの間黙りこむ大男。

それを不審に思った俺は煙草を吸う事無く普通に椅子に座りこんでいる彼に目を向けた。

路地裏で対峙した時から嫌というほど目にしていた厳ついヤクザのような顔と無骨な骨格はそのまま、安物のパイプ椅子に納められた不釣り合いな体躯の動きからも特に変わった所は感じられず、俺はただ意味も無く話を切っただけかと視線を再び適当な位置に戻そうとした。

だがその時、難しい表情を浮かべている大男の顔、その中で不自然に底が揺れ動く瞳に気付いた俺は、後ろの無機質な壁に向けようとしていた目で、彼のその瞳の奥を注視した。

厳つい面構えの中で不自然に揺れ動く眼球の根底。

そこには自分が次に発しようとしている言葉に対する動揺、いや、

どちらかという恐怖や畏怖に近い感情が滲みでていた。

がちりとした体躯と厳つい顔、今も腰のホルスターに納まってあるであろうトカレフ拳銃が語っている通り自分より長く特殊な人生を歩んできたであろう大男でさえも畏怖を感じ動揺を押し殺すような言葉を、まだまだ人生経験も知識も足りていない自分が予想出来た筈もなく、あの時の俺は一抹の動揺を必死で押し込める彼に早く話せと目で伝える事くらいしかできなかった。

そんな目に気づいていたのか、そうでないのかわからなかったが、俺が視線を適当な位置に戻した頃には大男は数秒の沈黙を自らの声で破っていた。

「そしてもう一つの弱点、これは現実には起きたとすれば世界のパワーバランスが完全に崩れ、抑止力の全てを無効化した後に大規模な戦争が起きる事になるだろう。鮮烈な威力を持つために忘れがちだが核兵器は既に半世紀前の兵器となっている。現在も核兵器は兵器の頂点として君臨しているが、その間も技術の進歩と革新は続いていて、光学兵器、つまりは収束した光で弾道ミサイルを迎撃する実験が行われたり、艦載砲として電磁砲の搭載が検討される時代となってきた。木を削り出した棍棒や黒曜石を加工した石器から鉄を溶かしこんで製造された刀剣、その鑄造技術に火薬が相まって銃や大砲が生まれたように技術の進歩と革新は必然的に現存する兵器を古い物へと変えてしまう。無論、今現在辛うじて王座に鎮座している核兵器も例外ではない。冷戦時のアメリカ合衆国に約二万七千発も存在していた戦略核兵器だが、現在はだいたい六百発弱にまで大幅に削減されている」

序

「これは冷戦により疲弊した国家予算で巨大な核戦力を保持しきれなくなつた事や、世界が核兵器廃絶を訴え始め、核保有に関するさまざまな条約が生まれた事が理由として挙げられるが、この国の首脳陣は核軍縮が進み始めた主たる理由をそうは考えなかった。何故なら核兵器という世界のパワーバランスを握る強大な力、戦争を抑止する力となりうる兵器をそう簡単に手放したり削減を行う訳が無いからだ。そうにも関わらずアメリカやロシアなどの核兵器を大量に保有する国が核廃絶に向けて動き出したり、今まで開発を行つていた国が急きよ開発を取りやめるのには必ず裏がある」

沈黙を破つた大男の声色は重大な事実を俺に伝えようとしていたせいか、トーンが少し落ちていているように聞こえていた。

しかし、彼の芯の通つた声はまだ健在で、どすのきいたそれは確かに俺の耳に届き、自分に世界各国が行い始めている核軍縮について考えさせていた。

大男の話した通り、核兵器は兵器としての威力も外交のカードとしても非常に優秀で、いくつか数えられる問題点を考慮したとしても他国に大きな力を誇示できる事は変わらない。

それにも関わらず、核兵器が廃絶に向けて歩み出したのは、日本への原爆投下や冷戦中に幾度も行われた核実験が国際世論を動かし、核廃絶を訴える人間たちが核保有国の首脳陣を動かしたのか？。

いや、それは否だ。

核兵器は互いに保有する事で牽制し合い核抑止力を生み出して世界の平和を保つ一役を担っている、核兵器を保有したい国の首脳は国民に対し「核兵器は仮想敵国との間に抑止力を生み出し、仮に核戦争が起こったとしても被害を最小限に抑える事ができる平和を保つ手段だ。それに、歴史上に核兵器を使い世界を破滅へと導いたゴミ野郎と名前を刻まれない人間などこの世にはいない」と主張すれば、核保有におけるある程度の正当性は認められるだろう。

その事を考慮すれば平和を望む人間たちが核保有国の首脳陣を揺り動かし、核廃絶に向かわせたとは考えにくい。

だとすると、核廃絶にあまり乗り気ではない核保有国と核廃絶を求める人々、両者の利害が一致した所に核保有国が核廃絶に賛同した理由が隠されている。

核を手放したくない核保有国を核廃絶に向かわせる要因……。

「核保有国が核廃絶を掲げ、自国を守る鎧でもある核を削減する理由であり、核抑止力のもう一つの弱点。それはもしかすると核保有国が核兵器を超える“新しい抑止力”の出現を危惧したからではないのか？」

本来なら核廃絶に非協力的になる筈の核保有国が核廃絶に乗り気になる理由、それを考え始めた瞬間、数刻前に話した大男の言葉が稲妻のように頭の中を駆け巡り、今まで頭の中ではばらばらに飛び交っていた情報のかけらが一つの確立した答えとなっていた。

「核兵器の廃絶、それは核保有国にとって非常にリスクの高い行動だ。何故ならとある国家がもし核戦力を縮小、または廃絶するとなれば自国と核保有国との間にあつた核兵器で牽制しあうという関係は完全に崩れ、もし外交的、軍事的に核保有国と対峙する事になつたとしても自国を守る手立ては無いからだ。でもお前の言う通り世界の軍事力や技術力は不変の物では無く、時が進む毎に世界各国の技術者たちは新しい技術や兵器を生み出している。つまり、核保有国はおよそ半世紀前の技術が生み出した最高の兵器である核兵器を超える兵器を現在の技術で製造可能と予測し、それを製造するために半世紀前の遺物である核兵器を廃絶に向けた。これを国民に核無き世界の実現という形で核に代わる兵器の開発に関する事を伏せて発表すれば平和主義者だけでは無く一般市民からも多くの賛同を得る事が出来る。そうする事で政府の利害と国民の望みの向く方向が一致すれば核保有国が核廃絶を唱えてもおかしくない」

まるで身を乗り出すかのように大男に向けて自身の考えをぶつけた俺、今考えればあれほどまでも自分の感情をむき出しにして話したのは歩んできた人生を省みてもあれが最後かもしれない。

別に特段、国防や核抑止力等の軍事論に関して興味があつた訳ではない、恐らく限られた情報を組み立てて自分なりの考えを出すという、それまで生きてきた中であまり体験する事の出来なかつた行動と答えを出す事で感じられる達成感、それらが冷静であろうとする理性を黙らせて、それまで何事に対しても斜めに構える事を決め込んでいた小さな体躯を突き動かしたのだろう。

そんな俺の考えに対し、聞き手となつた大男は「驚いた。必要な情報は与えたが、そこから答えが出せるとはな」と眉を吊り上げ少し

驚いた様子を見せながら低い声を返していた。

序

「お前の言っている事は正解だ。この国の首脳陣は核保有国が核を削減するという事は核を超える兵器の開発が既に構想、実験段階という実用可能という判断が出せる段階に來ていると考えた。もしそれが実用化まで漕ぎつけたとしたら全世界で牽制し合い平和を保っている核抑止力の関係が完全に崩れてしまい、“核を超越する新兵器”を保持した国が全世界の覇権を握ってしまう。“核を超越する新兵器”を保持しているのなら、それを敵対する国家に撃ちこんでデモンストレーションしてしまえば全世界に核を超える兵器の存在を脅威としてアピールする事が出来るのだからな。半世紀ほど昔に起きた広島と長崎に対する原爆投下の時のように。軍事大国であるアメリカやロシア、高い技術力を誇るドイツ、急速に工業化と軍事化を進める中国、そして、物事を水面下に隠し通しながら計画を成功させる隠密性を持つ北朝鮮。これらの国にかかれれば核を超越する脅威となりゆる兵器の創造と開発にはそれほど時間を要さないだろう。それらの国に対抗するには日本も核を超える新兵器の開発に取り掛かるべきなのだろうが、残念ながら戦争の放棄と交戦権の否認さらには戦力の不保持をうたった憲法9条という枷が存在している限りよほど秘密裏に事を進めない限り新兵器の開発は不可能だし、開発が他国に漏れたとすれば中国や朝鮮は勿論の事、新兵器開発を目論む国々と国内世論から総スカンを食らい、新兵器開発を断行した政権は倒れ、国内は大いに乱れるだろう」

核という軍事国家が互いに牽制する為に必要不可欠なピース、それぞれの国の防衛論を考えればそれを簡単に廃絶に向ける筈がない。

それは、核が現状で判断すれば最高の戦略兵器である事が理由とし

て考えられるからだ。

たとえ調達した物が旧式の核兵器だったとしても移送手段が確立してしまえば全世界の国々に自国の真上に核の炎が降り注ぐという純粹な死への恐怖を与える事が出来る核の兵器的な特性上、現在開発されている迎撃兵装の迎撃率が低いうちは、核に対抗するには自国も核戦力を持つ他方法はない。

だが、今現在でも核の削減は続いている。

その要因としては核の高性能化で大量の核を保有する必要が無くなった事や、そもそも核保有国に巨大な核戦力を保持する為に割く軍事予算が少なくなつた事、核を嫌う国民と核廃絶を求める組織が増え、それに対し核を制限する条約の締結を決断する他なくなつた世界情勢が挙げられる。

でも、それらが全世界の人々や軍事評論家たちが勝手に導きだした幻想だとすれば話は大きく違ってくる。

核という巨大な力を廃絶に向けるという事実、それを国民に公表すれば核保有は平和を保持する事ができると核抑止力を信じる一部の国民以外は核廃絶に賛成する事だろう。

巨大な力を捨てるという事実で世界の平和に本気で貢献していると考えられる国民と、核を捨てて平和な世界を創りだすという事を目標に掲げる国家体制を作りだす事ができれば、核廃絶という事実国民を酔わせる事に成功すれば核廃絶というハリボテの裏に醜悪な事実を隠す事ができる。

それはつまり、核戦力を削減しているという一つの結果だけを国民

に見せておけば、例えそれが虚偽だったとしても国民に信じ込ませる事ができるという事であり極端な話をすれば核廃絶という事実を見せて裏で行っている事を漏らさない絶対的な自信さえあれば、核廃絶とは裏腹に核戦力を増強する事や、核より最悪な能力を持つ新兵器の開発を進める事もできるという事なのだ。

“ 大衆は、小さな嘘より大きな嘘にだまされやすい。 ”

“ なぜなら、彼らは小さな嘘は自分でもつくが、大きな嘘は怖くてつけないからだ。 ”

独逸第三帝国に突如として出現し、圧倒的なカリスマで独裁者として君臨したアドルフ・ヒトラーがそう述べたように、小さな嘘はすぐに発覚するが、大きな嘘はいずれ真実になる。

半数以上の人間が虚偽を支持すれば残り半分の人間が納得してしまふ、一人ひとりが考えを確立できず周りに流される日本のような国家は特にその性質が強い。

そんな事実もあり、この国でも秘密裏に核武装や新兵器開発を行う事が可能だと思うが、そこで問題になってくるのが世界中から派遣されて来る各国の間諜^{スパイ}である。

序

真実を見極める国家首脳陣と名の頭脳、それに判断材料となる実像を送り続ける眼球である彼らに、核の調達や新兵器開発の情報が渡ればどうなるかは大体予想がつく。

情報の公開、過剰戦力への問題視、そして国連での決議、予想される事は全てが最悪な結末。

さらに、日本の場合はそれだけでは済まず、憲法9条という戦力制限の足枷がある以上、情報を公開された場合の他国からのバッシングの嵐の他に、平和が当たり前になった国内からの痛烈な批判はこの国を根本から揺さぶり、政権を持つ与党は当然の如く退陣を余儀なくされるだろう。

「そこで、この国の首脳陣は新兵器を新しい抑止力とするのを諦めて、そう遠くない未来に開発される筈のそれに太刀打ちできる別の抑止力を模索し始めた」

そう言った大男は、執務机に置かれた書類の束の一番上にあつた新たな書類を手に取ると、それを俺の方に向けて滑らせた。

「そうして政府が苦悩の末に考え出した核兵器に代わる“新しい抑止力”、大量破壊兵器といった巨大な力と違い、小回りや機動性、対応力に重点を置いた特殊な戦力、それがSpecial personal fighting forces、特殊対人戦闘部隊

だ」

書類を受け取り、それに軽く目を通す前に放たれた大男の言葉により、数刻前に渡された同意書に印刷されていた何かの略称であるSPFという三つのアルファベットの意味、そして、それが国防という巨大な組織の中でどのような役割を担うのかが一瞬で理解できた。

「この対人特殊戦闘部隊は自衛隊とは別に対兵士、対陸上兵器戦を想定して新設された部隊だ。全国から資質のある者を選抜し、一人の適性に合わせた戦闘兵育成プログラムを与え、一人の確立した兵士を作り出すのがこの部隊が新設された目的だ」

渡された二枚目の書類、この国の“新しい抑止力”となりゆる特殊戦闘部隊について簡易的な概要が書かれた紙に大男の話を聞きながら目を通していた俺は、下方に書かれていた入隊資格に目を向けていた。

「入隊資格は三つ、まず年齢が18歳以下である事、これは人体の持つ能力を最大限まで引き出す為にできるだけ低年齢の内から技術を叩きこんだり体力強化を行う必要があるからだ」

「次に二つ目は社会に後腐れが無い事、つまりは両親が存在していなかったり、町のチンピラやヤクザの下足番として生きている奴の方が社会との関わりが少なく、社会から隔絶された部隊の情報を漏らす事が無いので、他国の間諜や国民に存在を悟られにくいという利点がある」

と言った所で、大男は再び携帯灰皿のスライド式の蓋を開け、煙草を箱から取り出すと今日で数回見たジツポライターでそれに火を点けた。

そんな大男の姿を、俺は「また煙草か」と呟きながら横目で見ると、特殊部隊の概要が印刷された書類に再び目を戻した。

「そして三つ目、自ら凶器又は暴力を使い人間を殺した経験がある事だ。先程も話したが、これは対人戦闘を行うにおいて最も大切な資質だ。何故なら連続した対人戦闘を行う事が予測される部隊では人を殺した事によるシヨックでの精神的な影響は大敵だからだ。錯乱状態で他の構成員に向けて射撃してしまえばそこから綻びが広がって部隊の戦闘力を落としかねないからな」

自衛隊より優れた装備を与えられ、より確立された戦闘能力を持つ人間を作りだす事や、存在そのものが隠匿されている組織である部隊の情報を外部に漏らさない為には大男の話す入隊規約は理に適っていた。

人間の体力は20代でピーク値を迎え、そこからは緩やかに体力が落ち込んでゆく。

その事を考えれば若いうちから体力を鍛えるにこした事はないし、戦闘技術を同時進行で叩き込めば有事の際に円滑な対応を見せる事ができるだろう。

それに、自衛隊とは別に新たな戦闘力を新設した事が他国や自国の国民にばれば先程も大男が述べたように、憲法9条という一國平和主義を作りだす元凶ともなった足枷により、新部隊の設立を疑問視する他国と平和を望む国民から圧力や声が発生し、現在の政権は間違えなく倒れ日本国内は大いに乱れる事となる。

それを抑えるのに、社会との関わりの少ない人間を構成員とする事で情報の流出を最低限まで抑える方法は非常に有効なやり方だ。

そして、人の死という精神の根本部分に多大な影響を与える出来事に対し耐性の無い人間を部隊内に置いておけば、いざ有事の際に戦闘に参加した時に精神的ショックで味方を誤射したり、携行武器を使用して自殺しかねない。

序

怜悯で何事にも動じる事の無い、例え自分が放った銃弾が人を撃ち抜き殺したとしても平静を保っていられる強靱な精神は、人を殺すという“特殊で人の理念に反する行動”においては強靱な肉体や緻密な計算力を差し置いても必要となってくるスキルだ。

「実を言うと、その書類に書いてある入隊規約の全てを満たしている人間は全国をくまなく探したとしてもごく少数しか存在していない。何故なら上記の二項目を満たしている人間なら探せば十分見つかるが、殺人の経験がある人間となると話が大きく違ってくるからだ。存在が秘匿された組織であるがために警察の協力すら求められない俺らは全国から条件を満たす人間をリストアップし、そいつらに人員を送って直接部隊に勧誘したり今日のお前みたいに拉致つて来たりして構成員を増やしている。だが、お前のように政府が定めた三つの条件をクリアしている者は殆ど存在しておらず、仮に見つけたとしても刑事共が既に逮捕した後だったり、人を殺したという事実で精神が崩壊して到底使い物にならなくなってる事も珍しくない」

死に対する耐性という異能ともいえる力を持つ人間、彼らを警察を差し置いて、なおかつ隠密を貫き通して勧誘するのは非常に難しい事だ。

それは、人の死を目の当たりにしても揺るがない精神を持つ人間は絶対数が圧倒的に少ない事が理由として挙げられるが、最も主要な要因は、あの時大男が述べた一見、効率の良さそうでそうではない、

耐性を持つ人間の判別方法と集め方にあった。

大男が述べた通りに強靱な精神力を持つ人間は訓練で作りだせる物ではなく、元々精神の強い人間を雇うしか方法がない。

しかし、強靱な肉体や異常発達した視力等の見た目や検査で確かめられる能力とは違い、人を殺したとしても平静を保てる強靱な精神力というのは見た目で判断する事は難しい。

従って、見分ける方法があるとすれば強靱な精神力を持つと仮定された人間に誰かを殺させて経過を観察する事くらいしか無いだろう。だが、自然な環境で候補者に殺人を犯させる事に成功したとしても、殺人が露呈すれば候補者は全国の警察と情報を浸透させる事が身の上のメディア、そしてメディアから情報を受け取った国民の目という三者から追われる事になる。

せめて、警察に流れる情報を統制する事ができればもっと安全かつ円滑に候補者の勧誘を行えるのだろうが、当時、組織としては創設間もない部隊の幹部達は警察関係者、それも相当高位な場所に座っている者とのパイプを形成してる訳も無く、警察に流れる殺人犯の情報を統制する事はほぼ不可能だった。

仮に警察の包囲網を潜り抜けて候補者との接触到成功したとしても、人を殺したという事実を正面から受け止めて自殺を行ったり、部隊への勧誘を断った事により情報を漏らさない為、処理される候補者も存在していた。

これは纏が部隊に入隊してから聞かされた話だが、部隊の創設から今日に至るまで三つの入隊資格を満たしていた者は部隊創設から数

年後に除名された男と纏との二人で、その他の者は全て三番目の入隊資格を満たしていなかったらしい。

異常に優れた嗅覚や視力を持った人間等の常人の規格を圧倒的に凌駕する人間が存在し、調香師などの職業として彼らを企業がバーゲンセールに群がる主婦よろしく争奪戦を繰り広げると同じように、強靱な精神力を持つ人間は少なく、獲得につき込む労力も人員も従って多くなる。

平和を気取ってる国の中で彼らを獲得するのはやはり難しく、“新しい抑止力”といえども幾分かの妥協も必要なのだろう。

「そんな中で入隊資格の三項目を全て満たしたお前が転がり込んできた。上層部としてはお前を是が非でも部隊に引き込みたいようだが俺は強制はしない、ここは民主主義の国だから」

そう言つて大男は煙草の灰を灰皿に落とすと顔を歪めて笑みを浮かべて見せたが、黙って彼の話を聞いていた俺は到底笑えなかった。

他国にも、まして自国民にも秘匿されている対人特殊戦闘部隊の存在を教え、その部隊には社会に後腐れの無い者たちが集められている。

そんな事実の中で大男は俺を部隊に誘い、さらに部隊への入隊、“新しい抑止力”へ組み込まれる事を拒否する選択肢も与えてきた。

だが、実際に選択肢として存在していたのは“新しい抑止力”の礎となる選択肢、ただ一つだけだ。

入隊を拒否した候補者を社会に戻す事になれば、その候補者から社会に部隊の情報が漏れる可能性が出てくる。

そうなった場合、P S Fは存在を秘匿されてる部隊という特性上、存在が知れ渡った場合には部隊は壊滅、すなわち構成員の粛清へと直結する事になってしまっただろう。

序

もしそんな中で強引に候補者を勧誘し部隊に引き入れたとすれば、犯人の消えた事件として警察はさらに捜査網の大きさと密度を強化し、遺族側はメディアを通じて国民に犯人確保へ協力を求める事になり、それらが候補者の尻尾を掴まれてしまえば部隊の存在を悟られるのは確実。

憲法9条により戦力を持つ事を禁止されたこの国で、他国の脅威となりうる集団が表に浮かび上がって来たとするれば、まず疑惑の目が向けられるのは一体誰だ？

そう考えた時に真つ先に思い当たるのは国民達に知らせず秘密裏に法案を可決させ、核に代わる“新しい抑止力”を創造するにあたって一番関係が深く部隊の実権を握っているであろう日本というこの国の首脳陣であろう。

ならば、露呈した事実により国民、メディア、さらには他国の国民や首脳陣から疑惑の目を向けられ、真実を求める声を浴びせられたこの国の首脳陣がまず一番に実行しようとする行動は一体何か？

潔く部隊の存在を認める事？

国民や他国に違憲であることを謝罪する事？

自分自身のとつた行動の責任をとって辞職する事？

どれも違う、だが答えは簡単だ。

全世界の平和主義者、各国の首脳陣、そして自国民からも疑惑と追及を受け、完全に追いつめられた政府首脳陣と関係者達を選ぶ道。

それは、安全な場所から下界を見下ろしながら巨大な権力を振りかざしていた彼らを選ぶにふさわしい選択肢。

そう、巨大な権力という至高の玉座から一部を除く全人類からの批判という針の筈に引きずり降ろされる事を阻止するべく、彼らが一番に思いつく事は証拠の隠滅、つまりは部隊の存在と構成員の抹消だ。

メディア、国民達がどんなに真実を追い求めたとしても、求めるべき真実が消え失せてしまえば全てが闇に葬られる。

どんなに理不尽な情報操作を行ったとしても、帳尻さえ合わせていれば大概の虚偽は真実へと変化する。

その事を一番分かっている首脳陣は、P S Fの構成員と関係者達の粛清を断行し、部隊に関わる情報を全て抹消するだろう。

勿論、P S Fの構成員も粛清が行われる事が分かれば国家に背く事になったとしても、生きる為に、自分の命を守るために武器を取り、行動を起こす事が予想される。

所詮人間というのは自分の保身に一番力を注ぐ生き物。

どんなに醜い争いになったとしても、首脳陣は至高の玉座を守るため権力を振り降ろし、部隊の構成員は手にした武器と戦闘技術でそれに立ち向かう、正に地獄絵図が日本国内に体现される事になる。

そうなった場合、政府首脳陣もP S F構成員の両者の間に発生するのは不利益という負の連鎖だけ。

そんな、最悪の場合を考慮した政府首脳陣はP S Fに関して最大限の情報統制を行い、またP S Fの幹部達は絶対に情報を漏らさないシステムを考え出している筈だ。

完全防音の収監施設、大男が所持していたトカレフ拳銃。

それらを見てしまえば、P S Fへの入隊を断った者の末路はだいたいの予想がつく。

賤をしても親の思惑通りにいかない子供と同じように、口封じをした候補者に限って部隊の情報をうっかり漏らしてしまうかもしれない。

そのような候補者に完全な口封じをするとすると、方法は二つ。

完全に話す事も考える事もできない廃人にしてしまつか、一思いに始末する事。

その二つで始末する方法が採用されたのは、一生精神病院に収容されるよりも死んでしまった方が本人にとっても楽だと考えた部隊の粋なはからいなのだろう。

それを理解していた俺は、部隊に入隊しないという選択肢を選ぶ愚は犯さなかった。

せっかく自由を手に入れても、みすみすと溝に捨てるような真似をしても意味がない。

それに俺はあの日、自分自身に誓った。

三人の命という大きな負債を踏み倒し、手にした自由で一個人としての生活を取り戻すと……

本来なら服役し、反省の意を表す事で初めて消える罪を、人を殺し、罪を重ねながら踏み倒すのも悪くはない。

椅子の背もたれから背中を離し、執務机の脇にあつたペンケースを手に取り、中からボールペンと朱肉を取りだした俺は、目の前で静止していた同意書にサインし、それを大男へ向けて滑らせた。

「契約成立だ」

サインと自分の指紋がくつきりと浮かび上がった同意書、それを受け取った大男は不意に椅子から立ち上がると携帯灰皿に吸いきった煙草を押し込んだ。

「そついや自己紹介がまだだったな、俺は永川 義人、階級は三佐だ。歓迎するぞ天城 纏一曹」

さらにそう続けて口から息の苦しくなる白い煙をたなびかせた永川は、何故か俺を見て昔を懐かしむような目をしていた。

いや、あれは俺の勘違いだったのだろうか？

序

勘違いだったにせよ、そうでなかったとせよ、あの誓約書を永川に渡した時点で俺は“新しい抑止力”として防衛装置の部品として国家の枠組みに組み込まれる運命が決まっていた。

そんな運命を俺は受け入れ、負債を踏み倒すために今日まで行動を起こし続けてきた。

そして、今日も、歩むべき明日も例外ではない。

俺は、手に入れた自由を行使する為に前へと進み続ける……。

速度を緩めた黒のハイエース、死の執行人を乗せた漆黒の馬車は人気がない歩道を一瞥すると、靖国通り沿いに立てられた一棟のビルの手前で停車する。

車が止まり、全身に軽い衝撃を受けた事でふと我に返った天城 纏、彼は車内の床に鎮座するゴルフバッグを一先ず座席に移動させると、ハイエースのスライド式ドアを一息に開いた。

車内に渦巻いていた暖気を押しつけて侵入して来た、冷たく鋭利な冷気。

それを肌で感じた纏は、自分の居るべき場所は温かく安全な土地では無い事を改めて悟った。

そう、今の彼が存在を許されるのは、冷たく危険な夜の闇の中だけ。

安全地帯から身を乗り出し、夜風の冷気を吸収した凍土のように冷たいアスファルトに両足で立った死の執行人、彼は自身の武器が納められた巨大な鞘を背中に背負うと、ゆっくりと夜の帳の中へと消えていった。

*

命を燃やしながら輝く夜空の恒星、太陽の光を反射する事によって生まれる月光、それだけが唯一周囲を薄暗く照らすビルの屋上で纏は独り地上を見下ろしていた。

現在の時刻は深夜二時前。

都会というだけあり、たとえ深夜だったとしても数える程の人間と道路には少なからずの車両が存在しているのであるが、纏の見下ろす靖国通りはまるでゴーストタウンのように人の気配も車のエンジン音も聞こえない。

それほどまでに一切の音響がなく、深海のように深い深い静寂が続いているのは、しかるべき機関がこれから“事件の現場”となる防衛省前の交通量を統制しているからだろう。

部隊の創設から十数年ほど経ったであろう今、常に入れ替わってきたP S Fの幹部達と警察をはじめとする各機関へのパイプが形成され、今日のように流血前提の任務でも幹部の人間が様々な機関に情報統制を要請できるようになった。

それは、部隊が創設初期に発生した国家の大きなミス、それを当時

のP S F構成員が大規模な作戦を行い完全に闇へ葬った事で、部隊の評判が他の機関に知れ渡った事が起因となっている。

状況さえ整えれば知ってはいけない情報を知った人間の始末等の普通では行動に移せない事が指示を飛ばすだけで可能になる、自身の権力をつぎ込んだとしてもなかなか行う事の出来ない完全な口封じは大物政治家や官僚達にも、察庁をはじめとする各省庁の上層部から見れば魅力的な力。

少々の情報を捻じ曲げるだけでその力を行使できるなら安い物だと彼らは判断し、P S Fとの協力体制を喜んで受け入れたそうだ。

各機関との協力体制は部隊にとってプラスになったのかはまた別の話し、効率主義を基本とした部隊幹部の人間からすれば隠密性と効率を高める事ができる嬉しい誤算でも、部隊で実務を行う人間から見れば所詮、自分達は各機関の道具だという考えにしか繋がらない。

要は立場に合わせた考え方の違い、どんな社会にも存在する事だ。

それにいちいち文句を垂れていても何かが変わる訳でもないし、変えようと努力しても確立したシステムの前では当然徒労に過ぎない。

どんなに行動を起こしたとしても、それが無駄だと分かれば結局は自分の置かれている立場を理解してそれを受け入れていき、変えようとしていた意思是他人を蹴落としたとしても少しでもいい立場になりたいという闘争心が変わる。

ビルの屋上に設けられた腰ほどの高さに達するコンクリートの壁にゴルフバックを立て掛けた纏にはそれがよくわかっていた。

部隊に依頼を寄こす政府高官、各省庁の官僚、財政界のトップ達が皆そうであり、自分自身も犯罪者という立場を踏み倒す為に彼らの行動に加担しているのだから。

身を切るような鋭さと、少々もの哀しげな冷たさが同居する夜風の中で、纏は立て掛けたバックの上部に設けられたファスナーへ静かに指を掛けた。

(本部から識別番号00へ、指標アルファが機密情報取得の大詰めに入った。作業はあと五分程度で終了する。至急、地点で準備を進めろ)

自身の耳に取り付けられた無線式のヘッドセットに小さなノイズ音と無機質な男の声が流れる。

序

バックに掛けた指をそのまま、いつものように「了解」と一言だけマイクに吹き込むと耳を密かに刺激していたノイズ音が途絶え、名前も知らない男の声が再び聞こえる気配も無くなった。

その事を確認した纏は指でつまんだままのファスナーを引っ張り、バック上部の蓋となつている部分を開くと、月光で照らされてうっすらと中身の見えるゴルフバックの中に手を突っ込んだ。

数秒後間バックの中に納められた物体の形状を手で探り、それがいつも使用している仕事道具だと確認した手と一緒に、夜の闇に溶け込むようなダークグリーン色の物体が露となる。

八十センチ程ある全長の三分の一を占めている機関部が納められているであろう銃床、その先に取り付けられた握りやすさが重視されているのか複数の湾曲が見られるフォアグリップ、そしてそこから延びる冷たく細く黒い鋼鉄の銃身。

ステアー AUG

シユタイアー・マンリヒヤー製の正規品とは違い、ドラグノフ狙撃銃の高倍率スコープが転用され、銃身の先には通常時には装備されていないサプレッサーが取り付けられているそのフォアグリップを右手で握ると、纏は左手を引き金に掛けて正面の防衛省に銃口を向ける。

排莖方向を左に設定したAUGの高倍率スコープを覗きこむと、レンズの向こうに存在している防衛省の正門が映し出された。

スコープの向こうの防衛省正門を確認した纏は、狙撃にとって隠密性や射撃精度を高める上でも重要な伏射をとらずにAUGを構えたまま屋上に直立している。

スコープを覗き込んだまま微動だにしない纏、その脇を身を切るような鋭い風が吹き抜けた瞬間、彼の目から鋭さが消え、代わりに何処か不安げな表情が浮かんできた。

それは、強靱な精神力と理性で緊張の糸を保っていた纏に、一時ではあるが人間らしい隙が生まれたという事になる。

降ろされた夜の帳と完全な交通統制、それらが生み出す何処か落ちて着いた静寂が纏は好きなのだ。

誓約書にサインしたその日から社会に存在しない人間として扱われ、常に緊張が生活を支配する中で与えられたゆったりとした時間。

それが銃の引き金を引いて銃弾を射出し、数百メートル先の目標を殺害するまでの待ち時間だったとしても、人間はやはり落ち着いた時間を精神のよりどころとしてしまうのだろう。

防衛省正門を射るスコープ越しの鋭い眼光が、そこに現れる人物を殺害するのは少し先の話。

それまでの間、纏は空を埋め尽くす綺羅星と全ての音響を貪欲に取り込む静寂に自身の身を預けるのだった。

*

一国の省庁とあつても深夜となれば今までパソコンを叩いていた職員達も消え失せ、照明から発せられる光が照らしだしていた正面玄関も現在では夜の闇に染まっている。

そんな中で、前面に張り巡らされた硝子の窓から差し込む月光が床を静かに照らしだし、何処か幻想的な雰囲気醸し出していた。

唯一の光源である弱い月光を目指して玄関のホールをペンライト片手に進む男、斎藤 宗雄の姿がそこにはあつた。

四十代後半とは思えないほど老けこんだ顔とたつぷり脂を溜めこんだ体、高級そうな生地が使われたスーツを着込んだ彼の姿は防衛省の職員というよりも、長年職を全うしてきた政治家といったほうが当てはまつてるかもしれない。

歳以上に老けこんで見える彼は、顔を若干の戦慄で塗り固めつつ脂汗を全身に浮かべながら闇と月光の入り混じったホールを早歩きで移動している。

本来なら何時間も前に仕事を終え、今の時間帯は晩酌などを終えて既に床についている時間だったが、ここ最近の彼は何年も続けてきたその生活を大幅に崩していた。

今まで続けてきた生活を変えて五十代間近の体に鞭を打つ理由は、彼が焦燥の表情を浮かべる要因にもなっている胸ポケットに入れた一つのUSBメモリー、そこに納められた情報にあつた。

防衛省職員、それも防衛大学を出たキャリア組に位置する斎藤がここ最近になって関わり始めた最高機密であるとある事案。

今、彼が大切に所持しているUSBメモリーには、その事案に関する重要な情報が書き込まれている。

序

傍目から見れば、暗いホールを歩く彼は、残業をした上に家に仕事をもち帰る仕事熱心な男に映るかもしれない。

だがそれは、現在の時刻が午前二時を目前にしている事と、事案に関する一切の情報の持ち出しが禁止されている事を考慮しない場合、情報の持ち出しが完全に禁止されている防衛省、それも職員が一切存在せず、セキュリティシステムだけが起動している夜の闇の中からUSBを所持した男が現れたとなれば、考えられる可能性は二つ。

防衛省が関わる重要な事案の情報を外部の人間に売り、利益を得る可能性。

もしくはメディアに流し国民に公開する、一般企業における内部告発のようなものを行う可能性だ。

彼の場合は情報を流し見かえりを求める前者では無く、全くメリツトの無い後者だった。

前者の場合は外国の諜報機関等に情報をたれ込めば相応の報酬を得る事が出来るが、後者の場合は一個人の良心が満たされるだけ。

内部告発を行い、自分だけ聖人面をしている一個人の裏には、企業が倒れた事により路頭に迷う人間、頭が消えた事で足掻かない限り消えゆく運命にある下請け会社等の苦しむ者達が存在している。

それに、防衛省の場合は扱う事案が国家の最高機密に達し、一つの情報の漏洩が国家を大きく揺るがす可能性もあり、一個人の良心を満たす為に払う対価も官僚や職員だけでは済まず、彼らを頭として経済活動を行い、普通に生活している国民にすら何らかの影響が出るかもしれない。

頭脳という全身を統括する器官が破壊された場合、体を構成する細胞が生命活動を停止するのを余儀なくされ死滅するのと同じで、国家に関しても頭脳にあたる首脳陣が崩壊してしまえば国に住む国民にも大きな影響の波が押し寄せる。

頭脳を破壊し、全身の細胞に大きな危険をあたえるとしても情報が納められたUSBを持ち出そうとしているという事は、斎藤の盗み出した情報は他国、そして自国民にすら知られたくない重要な情報だという事が考えられる。

その場合、いくら秘密裏に情報の持ち出しを計画し実行に移したとしても、無論、防衛省のサイバースペースの守りは強硬。

表には目立った変化は表れていないが、既に情報が持ち出された事を警備システムがしかるべき人間と機関に伝えている可能性も大いにある。

そうなっていれば、防衛省周辺のビルに自分を止める為の刺客、“あの部隊”の実働部隊が潜んでいると斎藤は考えていた。

高層ビル郡を吹き抜ける夜風よりも、全てを薙ぎ払う旋風よりも低く鋭い、空を切り裂く音。

それと共に歩き出そうとした斎藤の後頭部から、ぱっと血の花が咲

いたのはその刹那だった。

突如迸った鋭い灼熱に一瞬驚いたのか、もしくは頭蓋を突き破り、脳細胞に達した異物が内部で暴虐の限りを尽くした事で思考回路が弛緩したのか、斎藤の体は一度のけ反り、先程まで確かな光を発していた目は一瞬にして虚ろな瞳に豹変する。

血飛沫の中に破壊された脳細胞の欠片や脳漿が混じり合った液体、それがすぐ後方に位置するタイル張りの床を染めると同時に、斎藤は霧散しそうな思考回路の中で二つの事を悟った。

自分の前頭部に遠方から飛来したライフル弾が突き刺さり、それが自分の脳細胞を暴力的な力で破碎した事。

そして、脳を完全に破壊された自分は、たとえ神の手を持つ医者をもつても助からないという事だ。

自分は何も成し遂げられないまま死ぬのか？

元々覚悟を決めていたせいか、驚くほど静かな嘆きは指揮系統を破壊された声帯からは出ることが無く、減少の一步を辿る脳裏に沈んでゆく。

脳裏の奥深くに消えた嘆きは、もう動かすことの出来ない筋肉や細胞の隅から隅へと染み込み全身を冷たくさせる。

そんな中、対抗する余地もない不可視で強大な力に見出だされた斎藤と名の人間は、血の尾を頭部から流しながら凍てつく程冷たい夕

イル張りの地面に身を打ち付ける事になった。

鈍い肉を打つ音と共に、斎藤は霧散しそうな意識の中で必死に自分の全てを一瞬にして奪った死神の目を探した。

だが、周囲ある物といえば都心には不似合いな樹木に、時間が止まったかと思うほど車両の存在していない靖国通り、そして夜陰の中から見下ろす長身の高層ビル……

遠方から一方的に狙撃されたのだ。

今から探した所で見つかる筈もないし、仮に狙撃手が見つけれられたとしても既に時は遅い。

そう言い聞かせ、自己完結させた斎藤は自分の額に形成されたであろう大穴について考える事を止めた。

代わりに考え始めたのは、必死に勉強して防大に入学し、並み程度の成績から国防に関わりだした自分の人生。

人生も終盤に差し掛かろうとした時に自身が足を突っ込む事になった狂気の計画。

序

そして、「貴方とは初めから性格が合わなかった」という言葉と離婚届けだけを残して家を出た、もう数年も会っていない家内と、まだ離婚の意味も知らない程幼い娘の顔。

結局俺は何も成しとける事が出来なかったみたいだな

内部告発による“国家の恥”を暴く事も、離婚して別居している家族にも何もしてやる事が出来なかった……

冷たい冬の冷気を吸収した地面に身を預けながら嘆く斎藤、彼は空を埋め尽くす弱くて小さな光の群れに一つの優しさを見出だした。

赤っぽい光や青白い光、それぞれ違う様々な光を放つ夜空の中から彼が見つけたのは、数年前までは毎日目にしていた優しい妻の眼差し、それに似たオレンジ色の恒星。

ああ、こんなに情けない自分にも、こうして送り出してくれる人がいるのか……

頭上天高くから優しい光を放つ眼、それに看取られてた事に気づいた斎藤の意識はそこで霧散し、静寂を保つ暗い大空へと飲み込まれていった。

長いようで凄まじく短い刹那の瞬間。

その中で、禁忌を持ち出そうとした一人の男が倒れ、引き金を引いた射手は更に罪を被ることになった。

だがそれは、ルールが決まっていないこの国の裏の顔からしてみれば当たり前前の事。

それを証明するかの如く、今まで保たれていた静寂がパトカーのサイレンで途絶え、再び都市圏の喧騒が靖国通りを包んでいった。

一章

遙か上空に広がる巨大な空、そこから降り注ぐ他の色彩を取り込み無に帰すような圧倒的な力を持った夜陰が、地上の全てを支配していた。

同時にコンクリート製の埠頭に叩きつけられた潮の流れが物悲しい音響を無に染まった世界に発し、圧倒的な夜の闇と相まって何処か寂しげな夜を演出している。

さらに、海上から陸地に向かって吹き付ける冬の寒さを孕み始めた夜風が、現実世界での寒さを静かに実感させた。

そんな、人気の無い夜の敦賀港、その中に存在するコンクリート製の埠頭に厚めのコートを羽織った一人の中年男性が立ち尽くしていた。

彼の見せる百八十二センチ、七十八キロの体軀は四十台の中では比較的長身で大柄な部類に入るが、目を配るのはそれだけではない。

付くべき所に筋肉がつく事によって、少し痩せ気味でもまだ全盛期に劣らずとも勝らない力を出せる図体。

睨んだ者を凍てつかせてしまうのではないかと思うほど冷たい二つの瞳。

彼の外観、それに全身から滲み出る戦慄を与える雰囲気は、寂しげな埠頭によく似合っていた。

その男の瞳が見据える先には、藍色に染まる大海、そして、夜陰を裂く事の出来る唯一の光源である月光が、夜陰の支配する海上を静かに照らし出している。

目線の先に存在する大海、その上に降り注いだ月光は、表面の藍色を白金を思わせる白い光に変え、波打つ海を一種の幻想へと変化させていく。

男の眼下に広がる光景、これを見た人間は殆どが知らず知らず美しいという感想を残すであろう。

月光で濁った水面下を隠す大海。気のせいか、これに似た光景を何処かで見た事がある……。

だが、ただえさえ冷たい空気を2、3 下げる様な冷淡な男が心中で呟いた感想、それは誰もが思い浮かべる一般的な物から何処か逸脱していた。

彼はその言葉を脳裏から波がひくように消え去った後に、視点を遠方に映える水平線から自身の下方に存在する埠頭と海水の境目に向ける。

そこには、白金を思わせる光の波がコンクリート製の埠頭に激突し、白い波頭を覗かせながら元の藍色に帰ってゆく光景が存在していた。

波頭が現れる瞬間、スーパーのレジ袋や波に揉まれ朽ち果てる寸前のプラスチック容器、表面におびただしい錆びを見せるスチール缶の残骸がその姿をぼんやりと明るみにさせるが、それも一瞬の出来

事で、それらはすぐに深い深い藍色の海と一体化してゆく。

幻想を体現した光の波と、現実を忠実に再現したかのような波頭と朽ちかけの人工物の波、そんな光景を男は黙って静観していた。

まるで、そこで誰かを待つかのように。

「水面下に沢山の秘密を隠しこみ、その表面を幻想的な月光で覆い隠す夜の水面。」

私もそれに似たような光景を目にした事がありますよ」

漸く来たか、寒い中数十分も待たされたこっちの身にもなっただいものだ。

男は不意に放たれた自身の心中を察したかのような落ち着き払った言葉に、多少の違和感を感じながらも、声のした後方に体を向けなおす。

体と一緒に前方に存在していた光の波を見るのを止めた目は、自身の後方から声をかけた一人の男を暗い闇の中で視認した。

男性には珍しい肩にかかりそうなくらい長い長髪から覗く彫の深い顔、帽子を目深にかぶっていてもなお夜陰の中で映える柔和な笑みに、細いがつくべき場所に筋肉がついている体、それに不釣り合いなゴツイ陸上自衛隊の迷彩服。

迷彩服の彼はそう言うとスーツ姿の男に向かってゆっくりと歩み寄る。

陸上自衛隊の迷彩服を身に纏っている所から単純に考えれば、目の前の迷彩服の男は陸上自衛隊の曹士か尉官と予測出来る。しかし、彼の首からストラップで吊り下げられていたドイツのH & amp; K（ヘッケラー&コツホ）社で開発されたアサルトライフルであるH & amp; K XM8、それが自衛隊の装備目録に記載されていない事も、アメリカ陸軍が次期制式アサルトライフルとして調達しようとしていたそれが、一個人の裁量で調達できる物では無い事も男は知っていた。

「暗く濁った表面を月光によって幻想的な光の波に変え、水面下に存在する物を隠し、人の目を欺瞞する大海。それは、汚職や外交、政治の問題を、報道管制や事故に見せかけた殺人によって国民からその事実を隔絶するこの国によく似ている。そう、この日本という国にね……」

さらに、一息に並び立てられた表情とは裏腹に、伶俐な男の声と彼の放つ凄まじい威圧感が、そんな考えを一瞬にして否定してしまっ

た。
相手の身長や顔立ち、物腰や話し方によって人間は相手の第一印象を決める。

それは、埠頭に立つスーツ姿の長身の男も例外ではなく、目の前で愛想のいい笑みを浮かべる男に対して一定の第一印象を持っていた。

一章

にこやかな笑みの裏に隠れる伶俐な声と異様な存在感、そして、すらりと伸びたしなやかな姿勢が迷彩服の男が自身と同じような境遇に置かれている人間だという第一印象を。

「そういえば自己紹介がまだでしたね」

歩み寄った迷彩服の男は柔和な笑みを表情筋に再び浮かべなおすと、そう言って自身の右手を差し出す。

「今回、この敦賀港に到着した『荷物』の搬入と組み立てを指揮している中西龍一という者です。以後、お見知りおきを」

階級と所属を答えなかった事により、迷彩服の男、中西龍一が自衛隊の尉官や曹士の類では無い事は判断できた。

何故なら、普通ならば公開しても差し支えない階級を口にしないという事は、中西が階級すら公開できない場所に身を置いている事が予想でき、『荷物』に関わっている人間の中でそんな場所に身を置いているとすれば、自身の同業者か“あの国”の人間しか考えられないからである。

階級章の無い陸自の迷彩服に装備目録に載っていない新型アサルトライフル、そして、絞られてくる所属の可能性から余計な詮索は無

駄だと考えたスーツの男は中西の右手を握り返すと、一応は相手も名乗ってきたんだ、自分も名乗るべきかと心の中で呟きながら口を開こうとする。

「吉田浩介一等海佐、ですね？」

だが、浩介が放とうとした言葉は踵を返すかの如く放たれた中西の声に遮られる事になった。

「確か、防衛大学を歴代最高の成績を持ちながら主席で卒業、防衛省の官僚になるためのエリートコースを歩んで行く事を期待されたが、当の本人は海上自衛隊第一潜水隊群所属の潜水艦おやしおの水測士に就任。防衛大学校始まって以来の天才であり、変わり者」

恐らく、軍属の身で浩介の年齢まで生きていれば、嫌でも苛立ちを苦笑いで償却する術が身に付くのだろう。

自身の言葉を無理矢理に遮られた事と、言わなくてもいい過去をわざわざ掘り返す中西に対して、浩介は心の中でかなりの苛立ちを感じている筈だが、表情に浮かぶのは自然な苦笑이었다。

「あと、周囲の期待を裏切って末端から国防に携わる人生を始めたものの、かつての天才ぶりは健在。特にソナーの扱いや潜水艦の運用術に長けていて、当時の司令官に時代が時代なら即、潜水艦の艦長に就任していると絶賛されたと聞いています」

冷たい夜風に当たり、スーツ越しに身体を冷やしている浩介は、寒い中で中西の長話に付き合わなければならぬ苛立ちを感じていた反面、彼が自身の素性をよく調べている事に若干の尊敬の念を抱いていた。

「それに、今回の件でも貴方の作成した航路や、『荷物』の輸送に潜水艦を使用するという案は非常に役に立ちました。お陰で『荷物』を誰にも知られること無く秘密利に輸送することができましたよ。それに関しては、とても感謝していますよ」

中西の話す『荷物』という単語、それを聞いた瞬間、浩介はただえさ難しい表情を浮かべているのに、さらに眉をつり上げて険しい表情を見せる。

『荷物』という単語が浩介の関わっている重大な事案の中で最重要機密に設定されている事、それが彼が険しい表情を浮かべる大きな要因となっていた。

「それは良かった。それで、私を呼び出したのには何か理由があるのだろうか？」

元々、合理的な行動を信条としている浩介にとって、中西の無駄な情報の混じった話はスーツに吹き付ける冷気と最近の職務による疲れと相まって、癢に触る物になっていたのだろう。

この酷い寒さの中でよくこんなに話す気力があるな、と半ば呆れ気味の浩介は業を煮やして苛立ちの混じった声を放っていた。

「ああ、そういうばそうでした。本題を話すのをすっかり忘れていましたよ」

そんな浩介の苛立ちに気づいているのか気づいてないのかわろくは無意味な笑みが支配する能面から読み取れることは出来なかったが、彼の目に入ってきた中西からは浮かべていた笑顔が不意に消え去り、代わりに中西の物とは思えない真剣な目が見られた。

無意味な笑みの仮面の裏に隠れた中西という男の本心、それを彼の真剣な表情を見る事によって少し触れた気になった浩介は、心の読み取れない相手と会話をする違和感を無くそうとしながらガラス玉のような双眼に目を合わせる。

「それでは本題に入りましょうか」

そう言つて中西は一瞬だけ再び無意味な微笑みを浮かべるが、その一拍後には真剣な表情をその能面に貼り付けていた。

「貴方の作成した航路、そして今回の輸送の為に日本政府が提供してくださった特務潜水艦いそしおにより『荷物』の敦賀港への搬入は秘密裏にして迅速に成功させる事ができました」

一章

「そして、横須賀港に運び込まれた後の『荷物』の組み立て作業も最終段階に入り、順次、器の方に搭載される予定でした。しかし、そこで重大な問題が発生したのです」

その瞬間、凍てつく程寒い外界の夜風と中西の言葉の中にある“重大な問題”という単語が、浩介の表情を凍りつかせた。

部品の納期の遅れや欠損なら技術者の増員、情報の漏洩ならしかるべき人間の始末と、通常の問題程度なら様々な方法で十分に解決できるが、今、中西は重大な問題が発生したと言った。

現在進行形で進んでいる『荷物』の事案、それは迅速かつ秘密裏に進めなければいけない特殊な事案であり、工期の遅れや情報の漏洩一つが致命傷となつて最悪事案は破綻する。

『荷物』の事案は完全に秘密裏に行え、もし工期の遅れや他の要因が原因で情報が漏洩した時は“清算”の嵐に巻き込まれる事を覚悟しておいてくれ。

ふと脳裏によぎった数ヶ月前に上司から聞いた『荷物』の事案に関する説明、彼の話した言葉から予想すればもし、『荷物』の事案が破綻という帰結を迎えたとすれば自分も含め、事案の関係者達は清算という破滅的な被害を被る事になるだろう。

「問題だと？、一体どのような物だ？」

一発で今までの計画の全てを破滅に追い込む“重大な問題”の内容を、浩介は顔を顰めながら恐る恐る問いかけた。

「わかりました、説明しましょう」

そんな浩介の問いかけに対し中西は不敵な笑みを不意に浮かべると、その不自然に歪んだ口から印象的な低い声を漏らし始める。

「横須賀港に搬入された動力炉、動力伝達系、電子機器等の各ユニットはドックの方で組み立てられ、もう少しで動作試験を始められる段階まで進みました」

そこで言葉を切った中西は、埠頭から覗く海面に目を向けると一拍後に再び口を開き始める。

「しかし、日本国内で作成されている完成していない部品が『荷物』にありました。それも、『荷物』の核となる重要な部分です」

耳に嫌でも入って来る事の真相に、やはりかと言わんばかりにはか
れた溜め息。

「国内で制作されている部品の完成の遅れ？それ位ならそれ程問題ではない。人員を増員して早期に完成させればいいだけだろう」

その後、浩介は少々焦った様子で問題への対策を講じるが、彼とは正反対に落ち着いた様子を見せる中西は、講じられた対策を黙殺して浩介に数枚の紙をクリップでまとめた資料を渡した。

数枚にも及ぶ長ったらしい文字列、その文字列を避けるように張られた顔写真、中西が何処からともなく取り出された資料を引っ手繰る様に奪い、静かに素早く見落としの無いように目を通す浩介。

すると、無造作に並んだ文字の列に目を通した彼の顔色が急激に変わり、本当なのか？と中西の目に問いかけた。

「確かに部品の納期の遅れくらいなら、人員の増員等で容易に解決できます。しかし、貴方に渡した資料にもある様に、問題は別の所にあります」

問題の真相を目で問いかける浩介に、冷静な表情で淡々と話す龍一。

彼は問題の核心部分に迫る前に、咳払いで話を一度区切る。

そして、心の準備は良いか？と問いかけるかのように一瞬だけ目を合わせた中西に、浩介は小さく首を縦に振り、答えた。

それを確認した中西は、こわばった表情を浮かべ、真剣な目を浩介

に向け直した後に、閉ざしていた口を開いて冷淡な声を発した。

「『荷物』の核となる部品、その製作にあたっていた製作者がつい先ほど部品と共に姿を消しました」

やられたか……、と彼は心中でそう呟いた。

資料に目を通した時に“重大な問題”の中身に関して薄々予想はついていたのだろう。

だが、資料に書かれた文字で理解するよりも実際に言葉で聞いた方が言葉に重みがあつたらしい。

龍一の口から漏れた伶俐な声、それが伝えた事実には、そう言わんとはかりに溜め息を吐いた浩介の眉間に一層皺が寄った。

『荷物』の搬入に感づいた各国の諜報機関の間諜が彼を連れ去ったのか、それとも彼自身が自分の意思で姿を消したのかわからないが……いや、過程なんてどうでもよかった。

『荷物』の事案は存在が明るみになった時点でこの国に大きな動揺を与える。

その事を考慮すれば、製作者の彼が『荷物』の部品を製作するにあたって精神的な苦痛に耐えれずに自分の意思で逃亡を図ったとしても、『荷物』の情報を嗅ぎつけた各国の間諜達が彼と部品を拉致していったとしても、結果だけが重要になる今の状況の中ではそれら

の過程は考えるだけ無駄。

どんなに過程を推測したとしても『荷物』の部品を製作者が持つて姿を消したという事実は今更変わらない、それならば無駄な推測を続けるより解決策を講ずる方がはるかに時間の有効活用になるのは猿でもわかる事だった。

一章

そう、今一番重要になるのは製作者の逃亡先に繋がる手掛かりがいくつ残っているかという事。

「それで、現在の状況は？」

『荷物』の部品と製作者が姿を消した事によって動揺していた浩介だったが、それは一時の事で、そう言った彼の声は驚くほど冷静だった。

「現在、私の仲間数人が製作者の自宅や周辺から手がかりを探しています。ですが正直な話をしますと当方の人数では製作者を探し出すことはほぼ不可能です」

そんな浩介の言葉に対して返された中西の声、それが伝えた状況は最悪だった。

製作者が自主的に逃亡し、『荷物』の情報をメディアへと提示しようとしているにしても、『荷物』の事案の存在を察知した某国の間諜が製作者をさらって情報を奪い取ったとしても、まず一番優先すべき事項は製作者の確保、場合によっては殺害。

それに行動を移すには、製作者が消えた先の手掛かりがどれだけ残されているかによって難度が変わってくる。

だが、現状では製作者へと繋がる手がかりは中西の話では零。

『荷物』の事案の情報が流出するまでとごく短いタイムリミットのの中で、手がかりの無いまま闇を進むというのはあまりにも無謀で難易度が高すぎる。

情報の流出の危機という逼迫した状況の中でできる最良の選択、それは製作者を捜す人員を増やす事。

そんな考えに一瞬で行き着いた浩介の脳裏には、現在の状況を解決する事ができる最良の選択肢、“あの部隊”の存在が浮かび上がっていた。

「そこで、できる事なら貴方の指揮する“部隊”のお力を借りたい」と思い、今回、この敦賀港まで呼ばせていただきました」

どうやら中西も浩介と同じ考えに行き着いていたらしい。

「あなたの部隊ならば情報戦部隊の偵察能力と、他国の間諜が相手でも作戦を遂行できる戦力を保持しています。今動かせるだけ的人员で結構ですので製作者捜索に力を貸していただけませんか？」

先程の説明にそう付け加えた中西の冷静な目が、しっかりと浩介を見据える。

そんな中西の視線に目を合わせると、その目の奥、眼球の根底部分で揺れ動く不安定な光、冷静さに入り混じる戦慄が現れている事がわかった。

それもそうだろう、彼は『荷物』の敦賀港への搬入と組み立てを指揮していると自身で話していた。

『荷物』の搬入と組み立てを指揮しているという事は、事案の内容を多少なりとも説明を受けている事が予想される。

そんな立ち位置に立ちながら、もし、『荷物』の事案の情報が流出したとすれば、組み立ての指揮という中間管理でありながら重要な職に腰を据えている彼も恐らく清算の対象とされて相応の処理が行われるだろう。

「わかった、うちの部隊の精鋭を製作者搜索、及び確保に充てよう」

『荷物』の事案に関して計画段階から携わっている浩介にとって、重大な失態を犯した人物や、情報を漏らす可能性が高い人物に適用される処置である“清算”という言葉は聞きなれた単語でもあり、この事案に身を置く中で一番の恐怖を感じている帰結でもあった。

だからこそ彼は、自身が指揮する部隊の精鋭を送り込む事を決意した。

『荷物』の事案を穩便に済ます為。

濃く濁った水面下にある秘密を秘匿し続ける為。

何より、清算という戦慄から逃れ、この先もこの国の闇の中で生き残る為に。

浩介の快諾を聞いた中西は「ありがとうございます」「と言い深く一礼する。

「では、ドックの方で詳しく説明を行いたいので私について来てください」

その一礼から、続けて数刻前を思い出させる笑みを浮かべた彼は、後方を向いて埠頭の先に見える真新しい大型艦船用の格納庫式ドックに足を向ける。

しなやかな、まるで猫科動物を連想させる中西の姿が遠ざかることに夜の夜陰に溶け込んでゆく。

「この国を冷たい外界から守る為の術、一騎当千とも言えるそれが、まさか両刃の剣だったとはな……」

そんな中で、波の音に掻き消されるほど小さく呟いた浩介は、一定の速度で規則的な安全靴の音を響かせる中西の後を追う。

そして彼もまた、中西と共に深い深い夜の闇に姿を消していった。

暗くて濃い、この世界の汚濁の中へと。

一章

コンクリートで塗り固められた壁と天井が回りを囲う閉塞感のある廊下。

そこは装飾品や壁紙、さらには窓すら見つける事の出来ない窒息しそうな空間だった。

空気を循環させるための空調設備は働いているであろうが、灰色だけが無限に続く廊下は自然とその場の空気を澱んで見せている。

纏は空気の粒子が全て鉛の原子に置換されたような重い雰囲気が漂う廊下を、ゴルフバックを背負い、A4サイズの茶封筒片手に機械的な足取りで歩いていた。

彼が今いる場所は市ヶ谷、防衛省付近の五階立ての古びたビル……正確に言えばそのビルの直下、即ち地下に設けられた施設の中だ。

数十年前、“新しい抑止力”を創設するにあたって青木ヶ原の樹海に設立された戦闘訓練所、それと共に当時の政府首脳陣は全隊員を指揮する為の参謀本部となる施設を防衛省近くの地下に建設した。

遙か上空、軌道上に位置する監視衛生との通信を可能とする大出力の通信装置、人類の頭脳では到底計算しつくせない数式を一瞬で処理するスーパーコンピュータ、そして万が一の時の為に様々な種類の武器が収められた武器庫。

秘密惻に国庫から調達された資金をふんだんに使用して造られたこの地下施設も、年による劣化で所々老朽化が始まり、最近では施設

移転の話も出ていたが、近年始まった世界規模の不況でその話も芥へと還ってしまった。

それでも、数十年前の最新技術を投入されて建設された地下施設は、まだ普通に使用する分には差し支えは無く、スーパーコンピュータ等の電子機器は古い物を新しい物に更新すればいい話だから、この地下施設は今でも十分に指揮系統の要として機能している。

纏を含めたP S F構成員は、そんな地下指令部に事案が終了したと共に足を運ぶのが通例となっていた。

狙撃時の姿勢や環境条件等の数十項目にも及ぶ記述欄が並ぶ報告書を提出するためだけに毎回纏はここを訪れているが、数年も同じ事を続けていれば面倒くささも無くなるのだろう。

彼は無機質な目を吸い込まれるかのような灰色の景色に向けながら、一定の歩幅、速度で廊下の奥深くに向かっていた。

核抑止力の名の元、ただがむしやらに核保有数を増やし続けたアメリカ合衆国とソビエト連邦、その両国を見て核抑止力における財政面での弱点を知った日本政府は、冷戦終結後に必ず起こるであろう世界の揺籃を見越して海上自衛隊の派生組織として対人、対陸上兵器戦闘を重視した特殊な揚陸部隊を組織した。

専守防衛が基本となっている自衛隊では有事の際に防衛しか出来ず、迫り来る脅威に攻撃する術は無く、防衛だけを行っていたら必ず息切れを起こし、その隙を突かれてしまえば極東の島国など一瞬で沈められてしまう。

それを防ぐ為に敵国の重要施設に揚陸して、圧倒的な戦闘能力で施

設を無力化する、つまりは相手の指揮系統、頭脳にあたる部分をピンポイントで破壊する事が新設された強襲揚陸部隊のコンセプトだった。

無論、攻撃能力のある部隊を新設するこの案は、日本という国を一國平和主義にしがみつかせている憲法第九条に阻まれるかのように多くの議員や政治家を敵に回す事になったが、それを上回る政治に携わる大多数の人間が承認した事により、強襲揚陸部隊の設立は国民に知らされる事無く承認された。

何故、平和主義国家において他国を攻撃することが可能な戦力が承認されたのか？、答えは簡単だ。

冷戦という静寂を保った巨大な国家間戦争を行ったアメリカ合衆国という同盟国、日本の首脳陣は完全に疲弊しきった彼らに国防を任せとおけなかったのだ。

20世紀においてアメリカという国は全世界に軍事的なプレゼンスを持つ程の超軍事大国だった。

だが、1990年代にその軍事的な力の根幹を揺るがす大きな自体が発生した。

冷戦の終結

それまで冷戦という一つの言葉で軍備増強を正当化し、核の増産や無駄な軍備拡張を続けてきた二つの大国はその出来事で一気に我に返った。

果てしない軍備の拡張による牽制、消費無き戦争は互いに利を生ま
ずに害だけを増やす。

その事を良く理解していた両国だからこそ、経済の破綻を目前にし
て冷戦状態を解除したのだろう。

冷戦状態解除という事実は、それまで膠着戦に巻き込まれていた世
界に大きな揺籃を生んだ。

例えばゴルバチョフ大統領の辞任から始まったソ連の崩壊や、冷戦
終結により戦略的価値を失ったキューバの経済危機、そして日本も
例外では無かった。

冷戦終結前までの日本は日米安保条約の元に、軍事大国アメリカの
軍を抑止力として使う事ができた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2626n/>

刹那の瞬間

2011年10月13日01時52分発行